

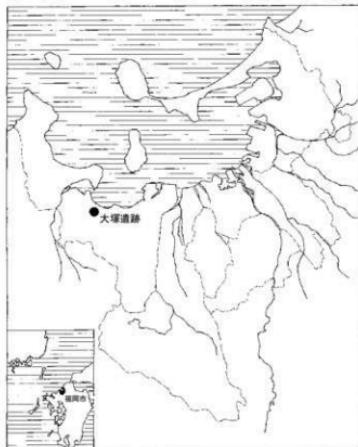
おおつか  
**大塚遺跡 3**

– 第8次・10次・12次・13次調査の報告 –

2009  
福岡市教育委員会

あ お つ か  
**大塚遺跡 3**

- 第8次・10次・12次・13次調査の報告 -



遺跡番号 OTS-8 OTS-10 OTS-12 OTS-13  
調査番号 0528 0659 0702 0715

2009  
福岡市教育委員会



# 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は西区今宿町の区画整理事業に伴い実施した大塚遺跡第8、10、12、13次調査の成果を報告するものです。遺跡周辺は、弥生時代の大規模環濠集落として注目されるようになった今宿五郎江遺跡や、6世紀の今宿平野の首長が眠る大塚古墳など、重要な遺跡が多く知られる地域でありますが、近年の大規模な発掘調査の成果によって、その具体的な姿や歴史的な移り変わりが明らかになってきました。

今回報告する各地点の調査からは大塚遺跡北部における平安時代と戦国時代の集落展開が明らかになりました。糸島地域の大規模莊園である怡土莊との関連や、戦国大名の大内氏による筑前支配の一端を窺うことができ、当地域の歴史を解明する上で重要な成果をあげることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただされることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々には厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田裕嗣

## 例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い行った大塚遺跡第8、10、12、13次調査の発掘調査報告書である。調査年度等は下表の通りである。
2. 第8次調査は阿部泰之が担当した。遺構・遺物の実測、撮影は阿部が行った。製図も阿部が行った。
3. 第10次調査は今井隆博が担当した。遺構の実測、撮影は今井が行った。空中写真は写真エンジニアリングに委託した。出土遺物の実測は米倉法子、撮影は今井が行った。
4. 第12次調査は今井隆博が担当した。遺構の実測、撮影は今井が行った。出土遺物の実測は米倉法子、撮影は今井が行った。
5. 第13次調査は森本幹彦が担当した。遺構実測は森本、宮原邦江、山田ヤス子が行い、撮影は森本が行った。空中写真は写真エンジニアリングに委託した。出土遺物の実測・撮影は森本が行い、遺構・遺物の製図は森本が行った。金属器の保存処理は埋蔵文化財センター上角智希が行った。
6. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は森本が行った。
7. 各調査の基準座標は国土座標（日本測地系）で、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点を使用した。座標北は真北より  $0^{\circ} 19'$  西偏する。本書で用いている方位記号は磁北で、真北より  $6^{\circ} 21'$  西偏する。
8. 本報告の出土資料および記録類は平成21年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

大塚遺跡 第8次調査	遺跡調査番号	0 5 2 8
地　　番	福岡市西区今宿町69-2他	遺　跡　略　号
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積
調　査　期　間	平成17年6月10日～平成17年6月30日	

大塚遺跡 第10次調査	遺跡調査番号	0 6 5 9
地　　番	福岡市西区今宿町345-1他	遺　跡　略　号
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積
調　査　期　間	平成18年12月8日～平成19年3月14日	

大塚遺跡 第12次調査	遺跡調査番号	0 7 0 2
地　　番	福岡市西区今宿町342-1他	遺　跡　略　号
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積
調　査　期　間	平成19年4月9日～平成19年5月7日	

大塚遺跡 第13次調査	遺跡調査番号	0 7 1 5
地　　番	福岡市西区今宿町336-1他	遺　跡　略　号
分布地図番号	112 今宿	調　査　面　積
調　査　期　間	平成19年5月16日～平成19年7月6日	

# 本文 目次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II.周辺の環境と遺跡 .....	2
III.伊都区画整理事業に伴う大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の調査成果概要 .....	7
IV.大塚遺跡第8次調査 .....	10
1. 調査概要 .....	10
2. 遺構と遺物 .....	11
3. 小 結 .....	11
V.大塚遺跡第10次調査 .....	16
1. 調査の概要 .....	16
2. 遺構と遺物 .....	17
①掘立柱建物 .....	17
②土 坑 .....	20
③その他の出土遺物 .....	21
3. 小 結 .....	21
VI.大塚遺跡第12次調査 .....	28
1. 調査の概要 .....	28
2. 遺構と遺物 .....	28
①掘立柱建物 .....	28
②土 坑 .....	28
3. 小 結 .....	30
VII.大塚遺跡第13次調査 .....	34
1. 調査区全体の概要 .....	35
2. 調査区東部 .....	37
1) 概 要 .....	37
2) 遺 構 .....	37
①掘立柱建物、柱穴列 .....	37
②土坑 .....	37

3) 遺 物 .....	39
① S K 4出土の遺物 .....	39
② その他の遺構出土遺物 .....	40
③ 調査区南東端の包含層出土遺物 .....	43
④ 遺物の時期について .....	43
3. 調査区中央部 .....	43
1) 概 要 .....	43
2) 遺 構 .....	43
①溝 .....	43
②土 坑 .....	44
3) 遺 物 .....	44
①SD2、3出土の遺物 .....	44
②SP33、SX38出土の遺物 .....	45
③鉄製品 .....	45
4. 調査区西部 .....	45
1) 概 要 .....	45
2) 遺 構 .....	45
①掘立柱建物 .....	45
②土 坑 .....	46
3) 遺 物 .....	51
5. 古墳時代以前の遺物 .....	52
6. 大塚遺跡第13次調査のまとめ .....	54
大塚遺跡第13次調査写真 .....	55
VII. おわりに .....	67

## 挿図・表 目次

第1図 今宿平野の遺跡分布 (1/25000) .....	3
第2図 大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の調査地点 (1/4000) .....	5
第3図 大塚遺跡第8、9、10、12、13次調査地点 (1/1000) .....	9
第1表 今宿五郎江遺跡と大塚遺跡調査一覧 .....	6

IV～VII章の各調査地点の報告では章ごとに挿図や写真の番号を付している。

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

本書で報告する大塚遺跡の発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施されたものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。

1996（平成8）年11月、都市整備局（現・住宅都市局）伊都区画整理事務所から事業地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では事業地全体について遺跡の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘地点の選定を行った。広大な事業地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲確定や、かつての潟湖と考えられる今宿砂丘後背地などの古地形復原を目的として、1996年12月～1997年2月、計68箇所の試掘調査を実施した。この結果、事業地南部の低丘陵や沖積台地上を中心として埋蔵文化財の分布が確認され、事業地北部の大半は砂丘後背湿地に当たり埋蔵文化財分布の可能性はないとの判断された。各地点の包蔵地範囲内については、工事工程との調整を行いながら必要範囲について随時、試掘調査を行い、遺構密度など埋蔵文化財の内容を確認したうえで、本調査に着手するという手順をとることになった。本調査は2002（平成14）年度の今宿五郎江遺跡の調査から始まった。

本書で報告する大塚遺跡第8次調査は試掘調査を2005（平成17）年5月26日、本調査を同年6月10日～6月30日に、第10次調査は試掘調査を2006年8月8日、本調査を同年12月8日～2007年3月14日に、第12次調査は試掘調査を2007年3月16日、本調査を同年4月9日～5月7日に、第13次調査は試掘調査を2007年4月23日、本調査を同年5月16日～7月6日に実施した。調査報告書作成のための整理はいずれも2008（平成20）年度に行なった。

### 2. 調査の組織

2005（平成17）年度から2008（平成20）年度の調査体制は以下のとおりである。

調査委託	福岡市住宅都市局（旧・都市整備局）伊都区画整理事務所			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣	植木とみ子（前任）
		文化財部長	矢野三津男	山崎 純男（前任）
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課	課長	田中 寿夫	力武 卓治（前任）
	埋蔵文化財第2課	調査第1係長	杉山 富雄	池崎 譲二（前任）
	埋蔵文化財第2課	調査第2係長	常松 幹雄	米食 秀紀（前任）
庶務担当	文化財管理課	管理係	井上 幸江	後藤 泰子（前任）
事前協議	埋蔵文化財第1課	事前審査係長	吉留 秀敏	濱石 哲也（前任）
		事前審査係	星野 恵美	

大塚遺跡第8、10、12、13次調査は以下の者が発掘調査と整理報告を担当した。

第8次調査 阿部 泰之（埋蔵文化財第2課第1係→埋蔵文化財第1課事前審査係）

第10次調査 今井 隆博（埋蔵文化財第2課第1係）

第12次調査 今井 隆博（埋蔵文化財第2課第1係）

第13次調査 森本 幹彦（埋蔵文化財第2課第2係）

## II. 周辺の環境と遺跡（第1図）

今宿平野は糸島平野の東縁部に開ける小平野で、東側を背振山系より北に派生する叶岳・長垂山塊によって早良平野と画され、南・西側を高祖山の山塊によって区切られた東西約6km、南北約2kmの 小平野である。今山～長垂間の今津湾に面する海浜部では、弓状砂丘が縄文時代後半期以降に形成され、その後背地には近世の干拓事業まで潟湖ないしは干潟がひろがっていた。南の高祖山山麓は北流する小河川の開拓により八手状に丘陵尾根が派生する地形をなし、平野東部では叶岳とのあいだに肩状地が発達している。大塚遺跡（1）の調査地点は高祖山山麓尾根の北端部にあり、昔の今津干潟に面するところである。

旧石器時代や縄文時代では、平成19年度調査の徳永B遺跡（7）で阿高系土器がまとまって出土しており、近くに貯蔵穴等があったとみられる。今山遺跡（9）では縄文時代前期以降の遺物を包含する砂丘層が層位的に把握され、玄武岩製石斧生産も縄文時代から行われていることが明らかになった（8次）。晚期では周船寺遺跡群（11、旧称の千里シビナ遺跡を含む）や飯氏遺跡（12）で土坑や埋甕などがまとまってみついている。大塚遺跡近辺でも旧石器や縄文時代の土器、石器が少量みられるが、集落の存在を示すものではなさそうである。

弥生時代前期～中期前半では、青木遺跡（4）で集落形成がみられ、谷遺跡（3）では突帯文系土器等にともなって板矢、杭列がみつかっており、弥生時代前期の水田とみられる（2次）。海浜部では今山遺跡の玄武岩石斧生産が前期後半から中期前半をピークに盛行しており、今宿遺跡（8）では墓域が形成される。西部の飯氏遺跡や周船寺遺跡でも集落と墓域の規模が大きくなるが、周船寺7次では、横列で区画された掘立柱建物主体の集落域がみつかっており、注目される。

弥生時代後半になると、今宿五郎江遺跡（2）が平野東部の中心的な集落となる。中期後半の径120m前後の環濠集落から後期の270×200mの環濠集落へと発展し、環濠の埋没が進む弥生時代終末期前後では集落域が拡大して、分村も増える。大塚遺跡（1）の最初の集落形成はこの分村であり、遺跡内の各丘陵尾根上に弥生終末期前後の集落が形成される。糸島東部では当該期の外来系遺物等の出土が今宿五郎江遺跡に集中しており、対外交渉の拠点となっている。また、付近では各種石器や玉類、木製品、青銅器、鉄器の生産が行われている。青木遺跡の後期集落は中期からの継続である可能性が高く、小規模な碧玉玉作も行われていたようである（1次）。今宿遺跡では継続して墓が営まれており銅剣副葬墓（2次）もみられる。

古墳時代初頭前後になると、海浜砂丘部の今山遺跡や今宿遺跡でも外来系土器の出土が増えるほか、製塩などが活発になり、新たに交易や生産の拠点となる。今宿五郎江遺跡や大塚遺跡は古墳時代前期前半までは集落が継続するが、前期後半が空白期となっている。この原因には沖ノ島祭祀の盛行にみられるような政治的背景のほか、今津潟湖の埋没が進むといった環境の変化も考えられる。今宿遺跡や飯氏遺跡では断続なく、古墳時代後半まで継続的に集落が営まれる。

古墳時代中期前半になると、平野内で小規模な集落が増加し、大塚遺跡でも堅穴住居を主体とする集落や旧河川から多量の祭祀遺物が出土する地点がある。女原遺跡（6）は主にこの時期から集落が形成される遺跡であるが、3次調査では韓半島系土器の出土が多く、渡来人の居住が想定される。古墳時代後期の集落立地は平野の南縁部から丘陵斜面を中心とする。大塚遺跡では、大塚古墳周辺にはこの時期の遺構がみられず、遺跡南部を中心に堅穴住居や掘立柱建物で構成される集落域が形成される。新聞須恵器窯（1）や新聞古墳群（55～60）が近在する。

今宿平野周辺の丘陵部には各時期の前方後円墳や円墳など400基以上の古墳が分布する。首長墳の



- 1 大塚遺跡 2 今宿五郎江遺跡 3 谷遺跡 4 青木遺跡 5 女原笠掛遺跡 6 女原遺跡 7 徳永B遺跡 8 今宿遺跡  
 9 今山遺跡 10 徳永A遺跡 11 周船寺遺跡 12 放氏遺跡 13 放氏引地遺跡 14 運町遺跡 15 丸腰山遺跡 16 山崎遺跡  
 17 千里中原遺跡 18 千里深谷B遺跡 19 千里深谷A遺跡 20 女原上ノ谷製鉄跡 21 新開製鉄跡 22 青木城跡  
 23 相原製鉄A遺跡 24 相原製鉄B遺跡 25 相原製鉄C遺跡 26 本村遺跡 27 側山製鉄遺跡 28 堀之内製鐵遺跡  
 29 堀之内遺跡 30 錦崎遺跡 31 間崎製鉄A遺跡 32 間崎製鉄B遺跡 33 シオガ谷製鉄跡 34 版氏古墳群A群  
 35 銀氏古墳群B群 36 銀氏古墳群C群 37 版氏古墳群D群 38 銀氏古墳群E群 39 版氏古墳群F群 40 銀氏古墳群G群  
 41 銀氏古墳群I群 42 版氏古墳群J群 43 徳永古墳群A群 44 徳永古墳群B群 45 徳永古墳群C群 46 徳永古墳群D群  
 47 徳永古墳群E群 48 徳永古墳群F群 50 女原古墳群A群 51 女原古墳群B群 52 女原古墳群C群 53 女原古墳群D群  
 54 女原古墳群E群 55 新開古墳群A群 56 新開古墳群B群 57 新開古墳群C群 58 新開古墳群D群 59 新開古墳群E群  
 60 新開古墳群F群 61 谷上古墳群A群 62 谷上古墳群B群 63 谷上古墳群C群 64 相原古墳群A群 65 相原古墳群B群  
 66 相原古墳群C群 67 相原古墳群D群 68 相原古墳群E群 69 相原古墳群F群 70 相原古墳群G群 71 相原古墳群H群  
 72 相原古墳群I群 73 本村古墳群A群 74 燐古山古墳群B群 75 錦崎古墳群A群 76 錦崎古墳群B群 77 油坂古墳群A群  
 78 油坂古墳群B群 79 長瀬山古墳群A群 80 銀氏B号墳 81 兜塙古墳 82 丸腰山古墳 83 山ノ森1号墳  
 F 若八幡宮古墳 G 下谷古墳 H 大塚古墳 I 新開室塙 J 谷上B1号墳 K 錦崎古墳

第1図 今宿平野の遺跡分布 (1/25000)

前方後円墳には、若八幡宮古墳（F、前方後円墳集成2期）、山ノ鼻1号墳（D、集成3期）、鷺崎古墳（K、集成4期）、丸隈山古墳（C、集成5期）、兜塚古墳（B、集成8期）、大塚古墳（H、集成9期）、飯氏二塚古墳（Bの西、集成9期）などが知られる。古墳時代後期後半になると谷上B1号墳（J、集成9期末）や飯氏B14号墳（A、集成10期）など、前方後円墳は40m未満となり、群集墳の築造が活発になる。女原笠掛遺跡（5）の直径約30mの古墳周溝（「今宿小塚」）はこの時期の大形円墳である。大塚遺跡の範囲内にある大塚古墳（H）は墳丘長64mの前方後円墳で、後期前半の首長墳である。二段築成で葺石と埴輪があり、盾形の周濠と外堤が巡る。埋葬施設は横穴式石室とみられるが、詳細は不明。前方部墳頂でMT15?の須恵器と陶質土器が表様されている。埴輪は肥君一族との関係が強い「肥後南部型」であり、筑紫君磐井の乱前後の政治的動向を知るうえで重要な古墳である（文献C）。

奈良時代前後では製鉄関連の遺跡が多くみつかっている。大塚遺跡14次と鷺崎製鉄A遺跡（31）1次では製鍊炉と横口付炭焼窯が、飯氏跡8次では製鍊炉と鋳冶炉がみつかっており、時期は7世紀後半～8世紀を中心とするものであろう。今宿の群集墳には製鍊滓の供獻例が散見されることから、当地での製鍊は6世紀後半に遡る可能性が高い。砂鉄に恵まれる糸島地方では奈良時代前後に製鉄が活発になるが、奈良時代後半に軍事拠点として築城された怡土城などに供給されたとみられている。大規模生産は志摩郡で行われており、今宿周辺の製鉄遺跡は小規模かつ短期間のものが多い。また、奈良時代の拠点的な集落が今のところ明らかではない。

平安時代になると、今宿平野でも中国陶磁器や綠釉陶器が多量に出土する遺跡がみられるようになる。一つは古くから知られる德永A遺跡（10）で、丘陵部の9世紀代を中心とする包含層から越州窯青磁他の中國陶磁器や綠釉陶器がまとまって出土しており、中世に下るかもしれないが鉄滓や羽口の出土も少なくない。「周船寺」という地名から周船寺との関連が考えられている。今宿五郎江遺跡でも近年の調査で台地縁辺の包含層から越州窯青磁他の中國陶磁器、綠釉陶器、瓦、鉄滓などが多く出土しており、9世紀後半～10世紀を中心とするようである。13次調査では青銅製の「寶」印が出土している。いずれの遺跡も当該期の遺構の様相が不明であるが、遺跡内に重要施設があったことは間違いないであろう。東西に通じる陸路の要衝に面しており、海浜部へのアクセスも容易な立地であるため、大府府の外郭施設が置かれていたものとみられる。今山遺跡8次調査では10世紀前半には造営されていた石組護岸のドックがみつかっており、その関連施設である可能性が高い。大塚遺跡では平安時代後半の遺構が主体となっており、本書で報告する地点などでは、建物主軸が南北方向に揃う掘立柱建物群などがみつかっている。台地の北端部ながらも当該期に初めて集落が形成される地区であり、聖田開拓關係の集落とみられる。糸島一円に営まれた皇室御莊園として有名な怡土莊（史料初見1131年）との関係が問題になってくるだろう。糸島地域の莊園關係の考古資料についてはあまり明らかになっていないが、加布里津に面する二丈町・木舟の森遺跡は、方形区画溝や大型掘立柱建物があり、大量の陶磁器などが出土していることから、莊園の政所と考えられている（文献D）。

鎌倉時代～室町時代では、今宿五郎江遺跡北部で掘立柱建物等の遺構が密集するようになり、墓もみられる。同様の状況は、遺構密度は高くないが、大塚遺跡や青木遺跡などでも確認されている。女原遺跡では古い集落立地の一部が水田化している（3次）。この時期に栄えるのが今津湾北部の今津であり、平安時代末から博多と並ぶ貿易や禅宗の大拠点となる。周辺の調査は少ないが、今津C遺跡1次調査では掘立柱建物などがみつかっており、12世紀代を中心とする中國陶磁器などが出土している。誓願寺南の調査では寺に関係するとみられる建物、溝、井戸、瓦、鐵錆などが出土している。勝福寺付近では古墓が発見され、多量の陶磁器が出土したことが知られている。文永の役のあと蒙古



第2図 大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の調査地点 (1/4000)

の再襲来に備えて築かれたのが元寇防壁であり、今宿地区は豊前国の担当であった。長垂山の北西麓から今山の東の海浜砂丘上に築かれるが、遺存状況はあまり良くなく、これまで調査は行われていない。

大塚遺跡で次にまとまつた遺構がみられる時期は、中世末の16世紀前半頃である。比較的密度の高い掘立柱建物群のほか、大塚古墳付近の調査では区画溝や柵もみつかっており、拠点的な村落と考えられる。15世紀～16世紀中頃は、大内氏の支配が筑前に及ぶが、大塚遺跡では防長系足鍋の出土が少

今宿五郎江遺跡						
次数	調査年度 年　月	弥生時代中後半 ～古墳時代初期前半	古墳時代 中～後期	平安時代 ～中世	備考	文献
1次	1984・秋	○ 墓 墓	○	○		1
2次 北台地	1985-	福岡市立農業試験場	○ 墓 墓	○		2
南台地			埋蔵内			
3次	1987・船橋所	○ 墓 墓			未報	
4次	1991・鉄塔	○		11次調査区内	3	
5次	2000・グール	○ 墓 墓	○		4	
6次	2001・共同住宅			○	12	
7次	2001・共同住宅			○	12	
8次	2002・伊都区画整理			○	5	
9次	2002・伊都区画整理	○ 墓 墓	○	○	5, 6	
10次	2004・伊都区画整理	○ 墓 墓	○	○	5, 7(整理中)	
11次	2005・伊都区画整理	○ 墓 墓	?	?	未報	
12次	2006・伊都区画整理	○ 墓 墓	?	?	未報	
13次	2007・伊都区画整理	○ 墓 墓		○ 聰 印	未報	

谷遺跡						
次数	調査年度 年　月	○	○	調査時は今宿五郎江9号墓杏214、空筒文士器を伴う矢張板、弥生前中期水田か	5	
2次	2005・伊都区画整理			未報		

大塚遺跡						
次数	調査年度 年　月	○	○	○	○	○
1次	1973・今宿ハイバス			○		14
2次	1973・今宿ハイバス	○				14
3次	1981・鉄塔	○		11次調査区内	8(写真)	
4次	1982・今宿ハイバス	○		○		15
5次	1982・南塙整備	○ 耕木・兼棺墓?	○ 那穴住居40余	○ 鋼鉄炉(平安)	未報	11
6次	1986・今宿ハイバス			○		9
7次	1988・共同住宅			○		10
8次	2005・伊都区画整理			○		未審
9次	2006・伊都区画整理	○ 河原に遺物多量採取	○ 河原に遺物多量採取	○	未審	未審
10次	2006・伊都区画整理			○		未審
11次	2006・伊都区画整理	○ 墓 墓	○	○	未報	
12次	2007・伊都区画整理			○		未審
13次	2007・伊都区画整理			○		未審
14次	2007・伊都区画整理	○ 耕木・鉄炉、鐵	○ ○	○	未審	未審
15次	2007・伊都区画整理	○	○	○	付近に鉄炉跡	未報
16次	2008・伊都区画整理	○		○		未報
大塚古墳	1977・確認済	弥生土器多量出土	○ 後期前半		未報	13

### <文献>

#### 福岡市教育委員会

- 「今宿五郎江道路」福岡市132集 1986年
- 「今宿五郎江道路」福岡市238集 1991年
- 「今宿五郎江道路」篠永木道路Ⅲ 丸山山道路群Ⅰ 福岡市479集 1996年
- 「今宿五郎江道路」福岡市737集 2003年
- 「今宿五郎江(5)」福岡市872集 2006年
- 「今宿五郎江(6)」福岡市924集 2007年
- 「今宿五郎江(7)」福岡市1009集 2008年
- 「(付録) 大塚道路第3次調査」『野方草原遺跡』福岡市490集 1996年
- 「大塚遺跡・女形遺跡」福岡市224集 1990年
- 「大塚遺跡第7次調査」福岡市256集 1991年
- 「(付録) 国の史跡「大塚遺跡」」福岡市146集 1986年
- 「(付録) 国の史跡「大塚遺跡」」福岡市256集 1991年
- 「(付録) 国の史跡「大塚遺跡」」福岡市146集 1986年
- 「今宿五郎江第6-7次調査」(福岡市埋蔵文化財年報 VOL.16)福岡市 2003年

#### 福岡市立歴史資料館

- 「福岡平野の歴史 緊急発掘された道路と遺物」特別展 1977年
- 「福岡市西区・糸島郡前原町所在道路の調査」今宿ハイバス関係5集 1977年
- 「今宿高田遺跡」今宿ハイバス関係10集 1984年

第1表 今宿五郎江遺跡と大塚遺跡調査一覧

なくなく、示唆的である。青木遺跡では、後続する16世紀後半以降を中心とする集落がみつかっている（4次）。平野東部の堀ノ内遺跡（29）は14～16世紀の集落で、鍛冶場などもみつかっており、開発拠点としての村落と考えられている。

#### 【文献】

- A. 柳沢一男1986「位置と周辺の遺跡」『丸隈山古墳Ⅱ』福岡市教育委員会／
- B. 正木喜三郎2005「筑前国」「怡土莊」「四国・九州地方の莊園」講座日本莊園史10 吉川弘文館／
- C. 小嶋篤2008「九州古墳時代後期の埴輪生産」『後期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会／
- D. 桃崎裕輔2008「鴻臚館体制の崩壊から中世社会へ—遺跡に遺された中國商人の活動とその遺物—」『九州の中世学—交易・開発・信仰—』七隈史学会／
- E. 森本幹彦2008「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡群」『日・韓交流の考古学』嶺南考古学会・九州考古学会

### III. 伊都区画整理事業に伴う 大塚遺跡と今宿五郎江遺跡の 調査成果概要

大塚遺跡と今宿五郎江遺跡のこれまでの調査位置は第2図の通りであり、その概要是第1表の通りである。この中で伊都区画事業に伴うものは大塚遺跡が8～16次調査、今宿五郎江遺跡が8～13次調査である。今宿五郎江8～11次については「今宿五郎江」5～7の報告書でその本報告または概要が記されており、大塚遺跡8・10・12・13次については本書で報告する。また、今宿五郎江遺跡12次、大塚遺跡9・10・11・16次については現地説明会を行い、今宿五郎江遺跡13次の平安時代の鉄印と大塚遺跡14次の弥生時代鍛冶工房については記者発表を行っている。以下ではそれらの概要について、時代ごとにみていく。

弥生時代では、今宿五郎江9～13次と大塚11次で一連の環濠がみかかり、南北270m、東西200mの



大塚遺跡9次調査（第1地点現地説明会風景）



大塚遺跡11次調査（弥生時代後期の環濠）



大塚遺跡14次調査（弥生時代終末の窯付鍛冶工房）



大塚遺跡15次調査（古代の横口付炭焼窯）

環濠集落であることが明らかになった。集落の形成は中期後半で、後期が最盛期となる。この一連の調査で、中国鏡、貨泉、鋳造鉄斧、ガラス玉類、楽浪系・三韓系瓦質土器、列島各地の異系統土器などを含む多量の遺物が出土し、遺跡のイメージが一新された。特筆すべき遺構には今宿五郎江11次の方形井戸、12次の井泉状遺構（ダム状）、13次の環濠陸橋などがある。大塚遺跡では弥生時代終末前後の集落城が11次の他、14～16次でみつかっており、9次第1地点では旧河道から後期の遺物が多量に出土している。大塚16次の集落は今宿五郎江と同じく、掘立柱建物と平地式建物を主とする構成である。大塚14・15次は竪穴建物を主体としており、うち1軒は終末期前半の鍛冶工房であった。弥生時代の糸島地域では初例となり、さらに列島では最古段階の竈を有していたことから貴重な調査事例となった。

古墳時代では、大塚14・15次で中期前半を中心とする竪穴建物で構成される集落がみつかっており、陶邑とみられる甕、韓半島系軟質土器、製塙土器などが出土している。大塚9次第3地点では旧河道から祭祀土器や滑石製玉類などが多く出土している。初期型式の横穴式石室をもつ前方後円墳として有名な鶴崎古墳や丸隈山古墳の時期であり、今宿平野で集落数が増加する段階でもある。古墳後期については、大塚古墳周辺の調査であるため、関連する墳墓や集落の発見が期待されたが遺構はほとんどみつかっていない。古墳周囲の数百m範囲は墓域とみなされていたのであろう。

古代では大塚14・15次で製鍊炉や横口付炭窯がみつかっており、7世紀後半～8世紀とみられる。今宿平野の製鉄関連遺跡は少なくないが、横口付炭窯は鶴崎製鉄遺跡に続き2例目となる。横口の閉塞石に大塚古墳のものとみられる輪埴の大片が混じっており、古墳から石材等をもってきたようである。平安時代では、今宿五郎江遺跡から越州窯系青磁他の中国陶磁器、綠釉陶器、瓦、鉄滓などが多く出土し、13次調査では青銅製の「寶」印が出土している。9、10、13次など台地縁辺の包含層からの出土で、9世紀後半～10世紀を中心とする。弥生時代の環濠集落の範囲内に大宰府の外郭施設が置かれていた可能性が高い。

鎌倉時代～室町時代は、大塚14、15、16次で掘立柱建物、竪穴状土坑などの集落関連遺構や青磁窯跡がみかれている。今宿五郎江遺跡では遺跡の北部、古代以前がほとんどみられない地区にこの時期の遺構が集中するようになる。

本書で報告する大塚遺跡8、10、12、13次調査は大塚遺跡の北端部付近で、台地上に位置するが、奈良時代以前の遺構は基本的にみられない。集落の形成は主に平安時代になってからで、主軸が南北



大塚遺跡16次調査（弥生時代後期の平地式建物）



今宿五郎江遺跡12次調査（弥生時代後期の井泉）



今宿五郎江遺跡13次調査（弥生時代後期の環濠と陸橋）



第3図 大塚遺跡第8、9、10、12、13次調査地点 (1/1000)

方向に揃う掘立柱建物が整然と並ぶ。怡土莊にかかる墾田開発関係の集落である可能性が考えられる。13次調査東部は中世末の集落間連造構が中心となっている。大塚遺跡6、7次や16次東部でもこの時期の造構がまとまってみつかっており、大塚古墳周辺の丘陵尾根上東部を中心に中世末の集落域が形成されたとみられる。掘立柱建物群のほか、区画溝、櫛、地下蔵、石組井戸などがみつかっており、名主層の村落と考えられる。

## 大塚遺跡第8次調査

### IV. 大塚遺跡第8次調査

#### 1. 調査概要

本調査区は、高祖山から北に派生する低丘陵の北端部に位置する。調査区の南約100mに今宿大塚古墳が、谷を挟んで東には今宿五郎江遺跡が位置する。現地表面から約-70cmで遺構面の黄褐色粘質土となり、東側2/3は今宿五郎江遺跡との境界となる谷となり、河川堆積の粗砂層・泥炭質土層が堆積している。

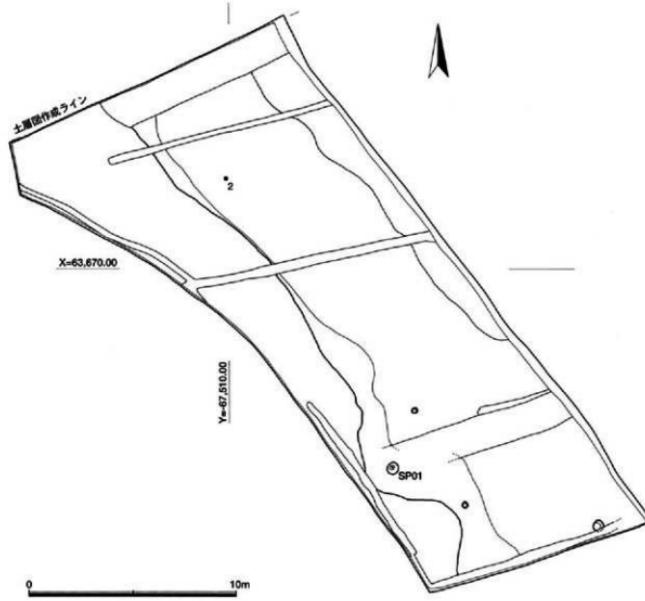


Fig. 1 大塚遺跡第8次調査区全体図（1/200）



Fig. 2 調査区北壁土層断面実測図（1/100）

## 大塚遺跡第8次調査

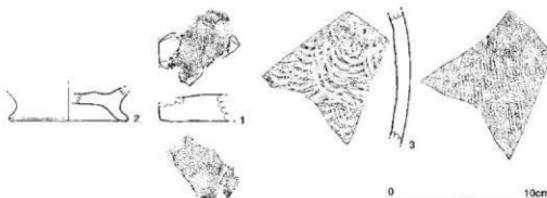
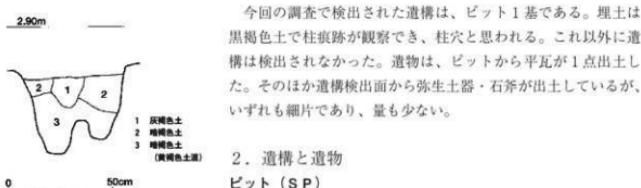


Fig. 3 大塚遺跡第8次調査出土遺物実測図 (1/3)



2. 遺構と遺物

ピット (S P)

S P 0 1 (Fig. 1)

Fig. 4 SP 0 1 土層断面実測図

調査区南西部にて検出した。整った円形の平面プランを有し、ほぼ中央部に径10 cmを測る柱痕跡状の部分が検出された。底面には西に半月形のテラスを有し、平坦ではなく最も深い部分に向け盛り上がる。土層断面をFig. 4に示す。暗褐色土を主体にした土が埋土で2層に分かれる。柱痕跡状の部分は灰褐色土で、検出面から15 cmで途切れ、底面には達しない。

出土遺物 (Fig. 3)

1は平瓦の小片である。図左側に側刃がわずかに残存し、凹面には布目痕が観察される。焼成は甘く全体に灰白色を呈し軟質で、全体に磨滅が著しい。

その他の遺物 (Fig. 3)

2は土師器碗である。検出面から出土した。底部の小片で、底径8.6 cmに復元される。全体に磨滅が著しい。3は須恵器壺である。表面採集。胴部の小片で、外面に格子目叩きが観察される。焼成は良好で胎土は堅緻である。

### 3. 小結

今回の調査では、柱穴と思われるピット1基を検出した。土層断面からは柱痕跡状の部分が観察されるが底面に凹凸があり、柱穴とするにはやや疑問が残るが、周囲の調査区では掘立柱建物が明瞭に検出されている。遺構面とその上層には漸移層がなく、水田化に際し削平がなされるとみられ、このピットも掘立柱建物を構成する柱穴である可能性は否定できない。遺構面の土質は粘土であり、台地は今回の調査区までは伸びないと想われる。遺構面にも部分的に粗砂がかんいでいる状況がみられ、頻繁に水をかぶる地点であったと推測される。いずれにせよ遺構・遺物ともに僅少で、大塚遺跡の北端部を検出したものであろう。

大塚遺跡第8次調査

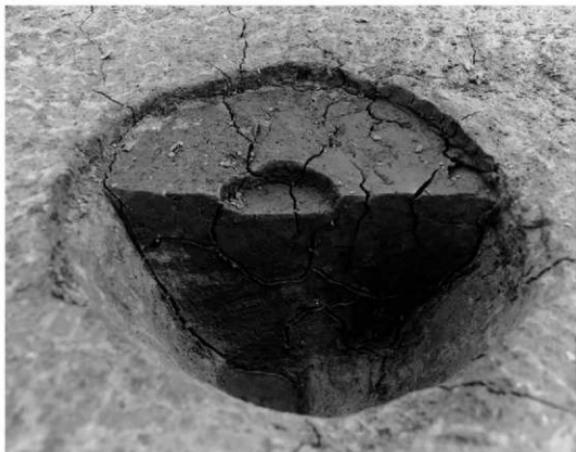


調査区全景（北より）



調査区北壁土層断面（西より）

大塚遺跡第8次調査



SP01土層断面（南より）





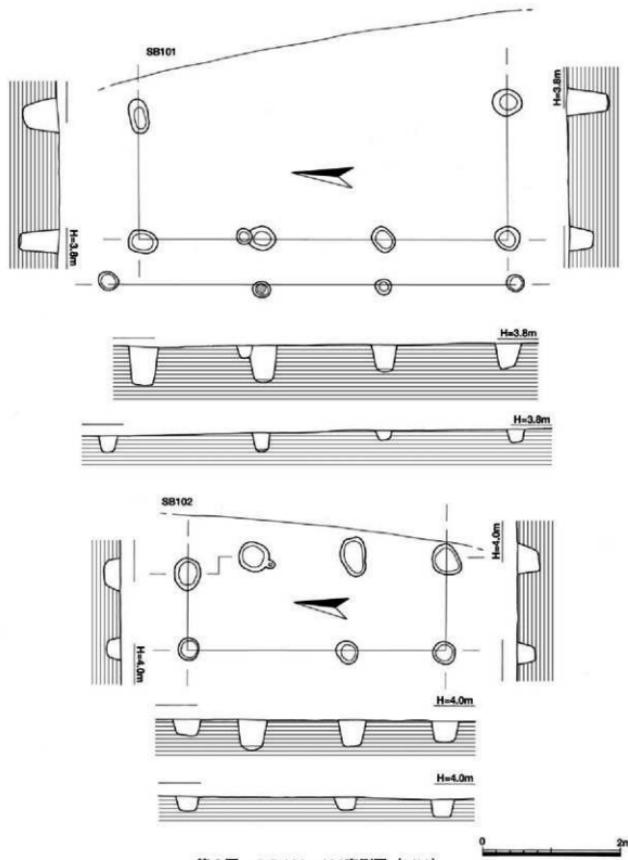
第1図 第10次調査区全体図 (1/250)

## 大塚遺跡第10次調査

### V. 大塚遺跡第10次調査

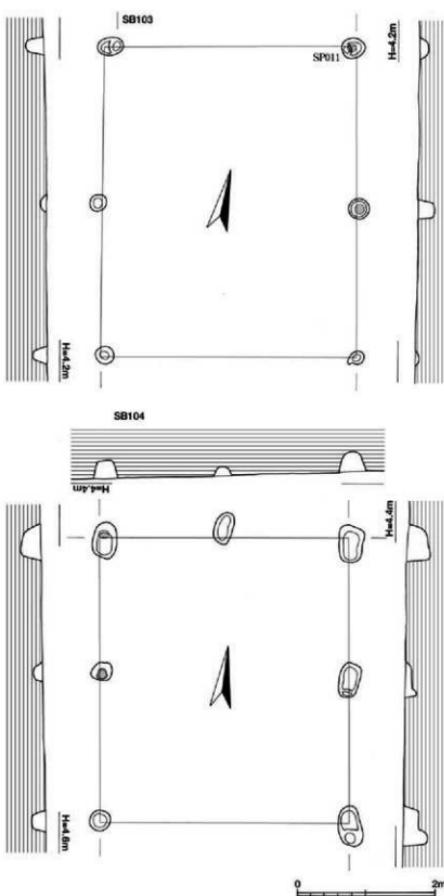
#### 1. 調査の概要

高祖山から延びる丘陵の先端付近にあたり、第9次地点の西側、第12次地点の北側に位置する。現地表より50~100cmで赤褐色粘質土の地山となり、この面を検出面とした。掘立柱建物7軒、土坑



第2図 SB101・102実測図 (1/60)

## 大塚遺跡第10次調査



第3図 SB103・104実測図 (1/60)

3基、ピットを検出した。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鐵滓などコンテナケース3箱分である。

### 2. 遺構と遺物

#### ①掘立柱建物 (S B)

##### S B101 (第2図)

調査区東端で検出した3間×2間以上の掘立柱建物である。西側には柱穴が一列並んでいる。柱穴の大きさは40cm前後で、深さは50cmほど残っているものが多く、遺存状況は良好である。出土遺物は少量の土師器小片のみである。

##### S B102 (第2図)

調査区東端、S B101の南側で検出した。2間あるいは3間×2間以上の建物である。柱穴は40cm前後のものが多くSB101と類似する。出土遺物は少量の土師器小片のみである。

##### S B103 (第3図)

調査区東南部で検出した、2間×1間の掘立柱建物である。削平のため遺存は悪い。

#### 出土遺物 (第5図)

SP011より土師器壺(1)が1点出土した。口径11.0cm、器高2.7cmを測る。底部はヘラ切り、内外面はヨコナデである。

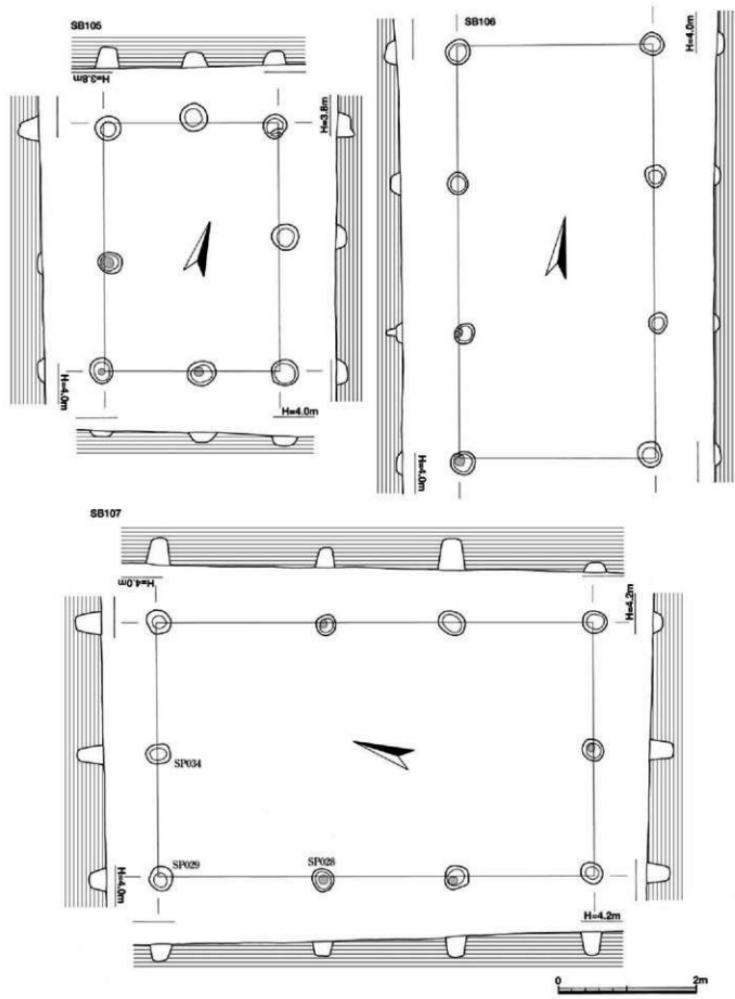
##### S B104 (第3図)

SB103の西側で検出した、2間×2間の建物である。柱穴の平面形が長方形または長楕円形のものが多く特徴的である。出土遺物は土師器小片のみである。

##### S B105 (第4図)

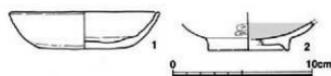
調査区北端付近で検出した、

大塚遺跡第10次調査



第4図 SB 105・106・107実測図 (1/60)

## 大塚遺跡第10次調査

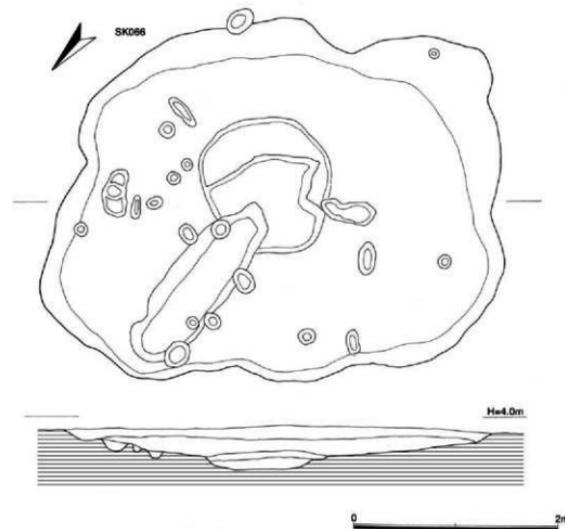
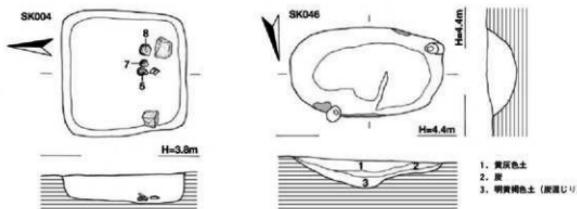


第5図 据立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

2間×2間の建物である。柱穴の大きさは40cm前後で、全て円形である。遺存状況の悪いものが多い。出土遺物は土師器小片1点のみである。

S B106 (第4図)

3間×1間の建物である。SB105と重なるが、



第6図 S K004-046-066実測図 (1/40)

## 大塚遺跡第10次調査

切り合う柱穴はなく前後関係は不明である。柱穴の大きさは30cm前後で、全て円形である。柱穴からの出土遺物はない。

### S B107 (第4図)

SB 105・106の西隣に位置する建物で、3間×2間の建物である。柱穴の大きさは30~40cmで、全て円形である。少量の土師器が出土しており、黒色土器A類が見られる。

### 出土遺物 (第5図)

2はSP 028・029・034より出土した小片が接合した椀である。内面のみ黒色を呈する。復原底径5.9cm、残存高2.0cmを測る。

### ②土坑 (SK)

#### S K004 (第6図)

調査区北東隅で検出し

た、1.2m×1.2mの方形土坑である。深さは30cmを測る。覆土は黒褐色土と黄褐色土がブロック状に混じったもので、人為的に埋めたものと思われる。比較的出土遺物が多く、土師器、須恵器が出土している。

### 出土遺物 (第7図)

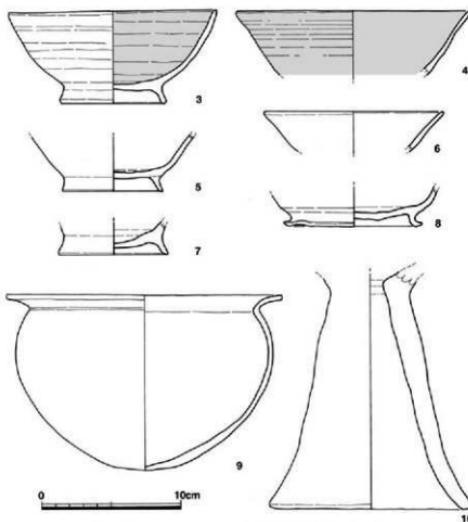
3は黒色土器A類の椀である。口径15.1cm、器高6.8cmを測る。4は黒色土器B類か。外表面がわずかに黒色を呈す。5・7は土師器椀、6は土師器杯か。8は須恵器の高台付壺である。高台部の歪みが著しい。

#### S K046 (第6図)

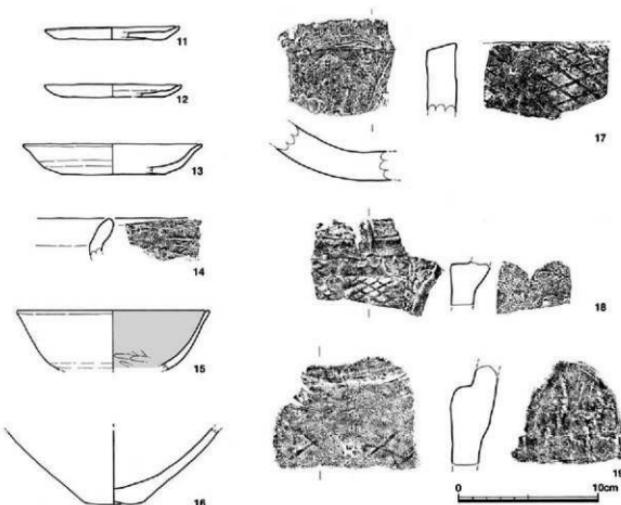
調査区南西部で検出した焼土坑である。長軸1.5m、短軸0.9m、深さ30cmを測る。壁は被熱により赤変している部分がある。覆土は炭を多量に含む。遺物は出土していない。

#### S K066 (第6図)

調査区北西部で検出した不整な長方形土坑である。長軸4.5m、短軸3.5mを測る。中央部には径1.3mほどの窪みが見られる。平面形は住居址のように見えるが、壁は明瞭な掘り込みは認められず、床面は中央部へゆるく傾斜していくことから土坑とした。弥生土器、土師器、須恵器が出土している。



第7図 SK 004-066出土遺物実測図 (1/3)



第8図 その他の出土遺物 (1/3)

## 出土遺物（第7図）

9は弥生時代後期の壺、10は器台の脚部である。小片のため図化できなかつたが、他に須恵器壺が出土している。

## ③ その他の出土遺物（第8図）

11~13・17はSX043より出土した。11、12は土師皿である。底部外面は摩滅のため不明瞭であるが、糸切りの痕跡は認められない。13は土師器杯である。復原口径13.0cm、器高2.2cmを測る。土師皿と同様ヘラ切りと思われる。14はSP015より出土した壺の口縁部である。15はSP017より出土した黒色土器A類の椀である。16は壺の底部か。17~19は瓦小片である。いずれも凸面には斜格子タタキ、凹面には布目痕が見られる。18はSP030、19はSP048からの出土である。

## 3. 小結

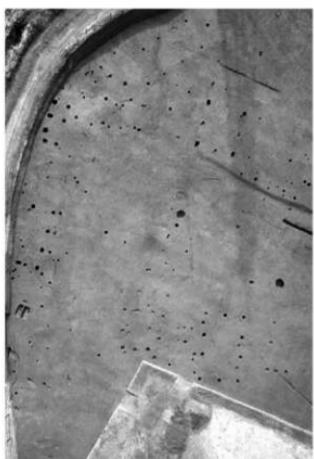
本調査地点では古代の掘立柱建物、土坑を検出した。調査区中央付近は削平によりほとんど遺構は見られず、遺構の大半は東端と西端で検出された。掘立柱建物は主軸の共通するものが多いことから、比較的短期間に存在したものと思われる。出土遺物が少ないため正確な時期決定は難しいが、ヘラ切りの土師器、黒色土器A・B類より10世紀前後の所産であろうか。掘立柱建物群より北側はほとんど遺構がなく、この付近が大塚遺跡の北限を示すものと思われる。



1. 調査区西半全景（南より）



2. 調査区東半全景（南より）



3. 掘立柱建物群（上が南）



4. 第10次地点と大塚古墳（北より）

大塚遺跡第10次調査

図版2



1. SB 101完掘状況（南より）



2. SB 102完掘状況（西より）



3. SB 103完掘状況（南より）



1. SB 104完掘状況（南より）



2. SB 105完掘状況（南より）



3. SB 106完掘状況（南より）

大塚遺跡第10次調査

図版4



1. SB 107完掘状況（南より）



2. SK 004遺物出土状況（西より）



3. SK 004完掘状況（西より）



1. SK 046土層断面（北より）



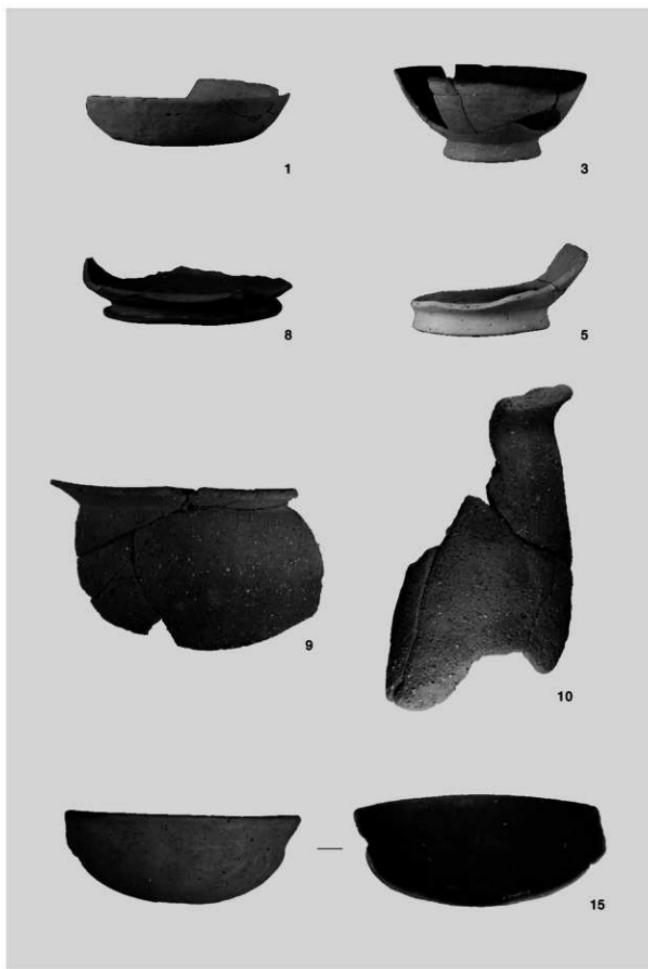
2. SK 046完掘状況（北より）



3. SK 046完掘状況（東より）

大塚遺跡第10次調査

図版 6



出土遺物（縮尺不同）

## 大塚遺跡第12次調査

### VII. 大塚遺跡第12次調査

#### 1. 調査の概要

第10次地点の南側隣接地であり、東には第13次地点がある。試掘報告より対象地の東半部は削平を受け遺構が残っていないと予想されたため、西半部のみの調査とした。現地表より-30~90cm程度で黄褐色・赤褐色粘質土の地山となり、この面を検出面とした。調査区内では東側および南側が高く、北と西に低くなる地形となっている。検出した遺構は土坑5基とピットである。ピットは径20cm前後のものが大半で、覆土は黒褐色土と灰色土のものがある。北壁付近のピットは掘立柱建物としてまとまる。土坑は炭と焼土の混じるもの、土壙墓と思われるものがある。北側の第10次地点と同様に出土遺物は非常に少なく、遺物はコンテナケース1箱分である。

#### 2. 遺構と遺物

##### ①掘立柱建物（S B）

###### S B19（第2図、図版1-2）

調査区北端部で検出した2間×3間の建物である。周囲四面に庇がめぐる。東側は南半部に庇がない。北側と南側がそれぞれ2間×1間の庇をもつ建物という可能性もあるが、ここでは1軒の建物と考えた。出土遺物は土師器と須恵器の小片数点のみである。

##### ②土坑（S K）

###### S K01（第3図、図版1-3）

長軸2.0m、短軸1.3mの楕円形プランの土坑で、深さは25cmである。遺物は出土していない。

###### S K02（第3図、図版2-1）

S K01の北側で検出した長軸2.1m、短軸1.0mの不整形な土坑である。焼土及び炭を含んでいる。遺物は出土していない。

###### S K03（第3図、図版2-2）

西壁沿いで検出した土坑である。長軸1.8m、深さ40cmである。刀子が1点出土した。土壙墓の可能性がある。

###### 出土遺物（第4図）

3は鉄製刀子である。欠損しており長さは不明である。

###### S K04（第3図、図版2-3）

長軸2.3m、短軸0.6mの土坑で、深さはおよそ20cmである。中央西寄りから土師器壺が2点まとまって出土している。土壙墓であろうか。

###### 出土遺物（第4図）

1、2はともに土師器杯である。1は口径11.6cm、器高4.0cm、2は口径12.0cm、器高2.9cmを測る。摩滅のため不明瞭であるが、ともに底部はヘラ切りと思われる。

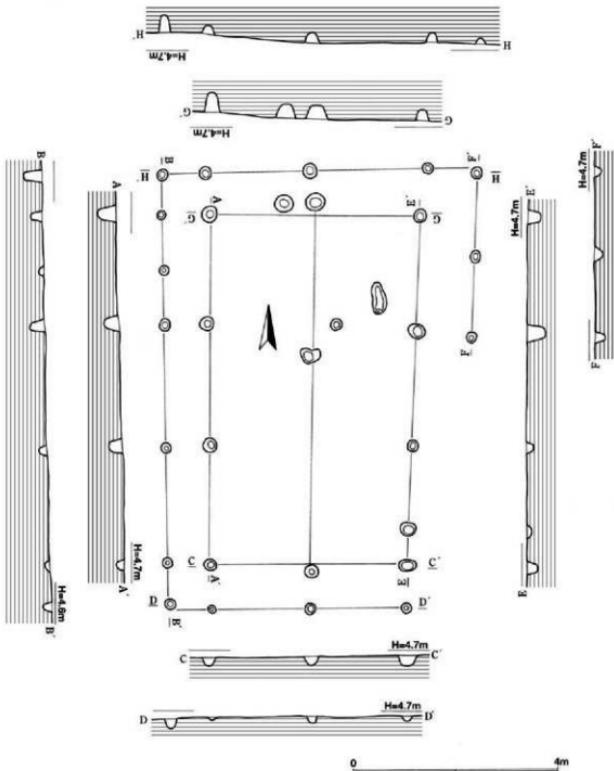
###### S K05（第3図）

西壁にかかっているため長軸は不明である。長軸の現存長1.4m、短軸は0.7m、深さ20cmである。SK03・04と同様の形態であることから土壙墓の可能性がある。遺物は出土していない。



第1図 第12次調査区全体図 (1/200)

## 大塚遺跡第12次調査

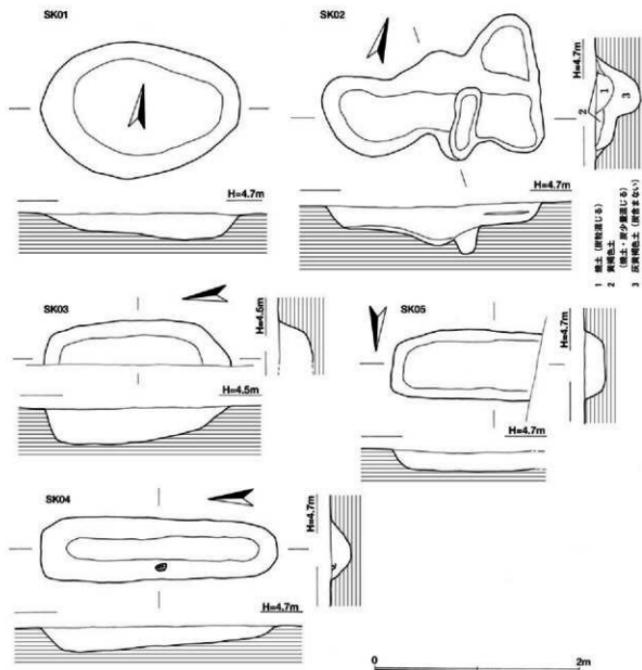


第2図 SB19実測図 (1/80)

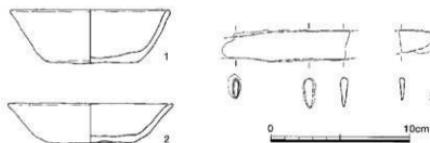
### 3. 小結

対象地中央部以東はほとんど遺構は見られず、大半は北西の緩斜面上で検出された。本来は対象地全面に遺構が広がっていた可能性があるが、削平により失われたものと思われる。今回の調査では掘立柱建物1軒あるいは2軒と土坑5基が検出され、当時の集落の様相を知る一資料を得ることができた。掘立柱建物柱穴からは時期の判明する遺物の出土はないが、主軸方向が第10次・13次地点のものと共通することから、古代後期のものと思われる。SK04出土の土器器坏はいずれもヘラ切りであり、10世紀頃の所産であろうか。

大塚遺跡第12次調査



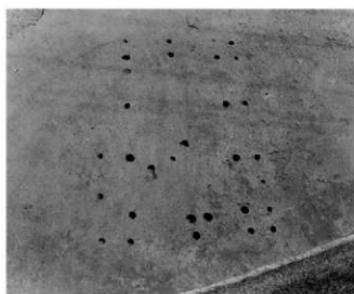
第3図 SK01・02・03・04・05実測図 (1/40)



第4図 出土遺物実測図 (1/3)



1. 調査区全景（北より）



2. 据立柱建物発掘状況（北より）



3. SK 01発掘状況（北西より）

大塚遺跡第12次調査

図版2



1. SK 02完掘状況（北西より）



2. SK 03完掘状況（東より）



3. SK 04完掘状況（東より）

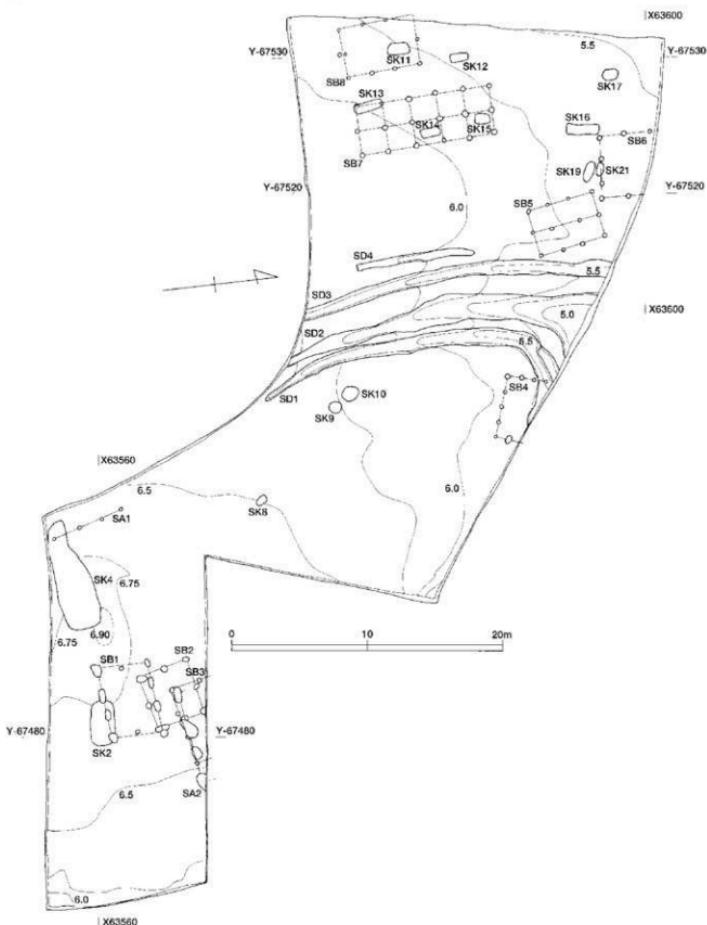


4. 第12次調査区と大塚古墳（北より）



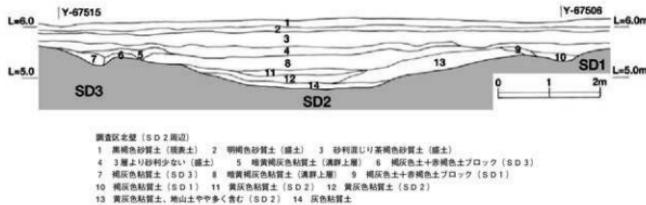
5. 出土遺物

大塚遺跡第13次調査



第1図 13次調査区の主要な遺構と等高線 (1/300)

## 大塚遺跡第13次調査



第2図 調査区北壁（SD2付近）土層図（1/80）

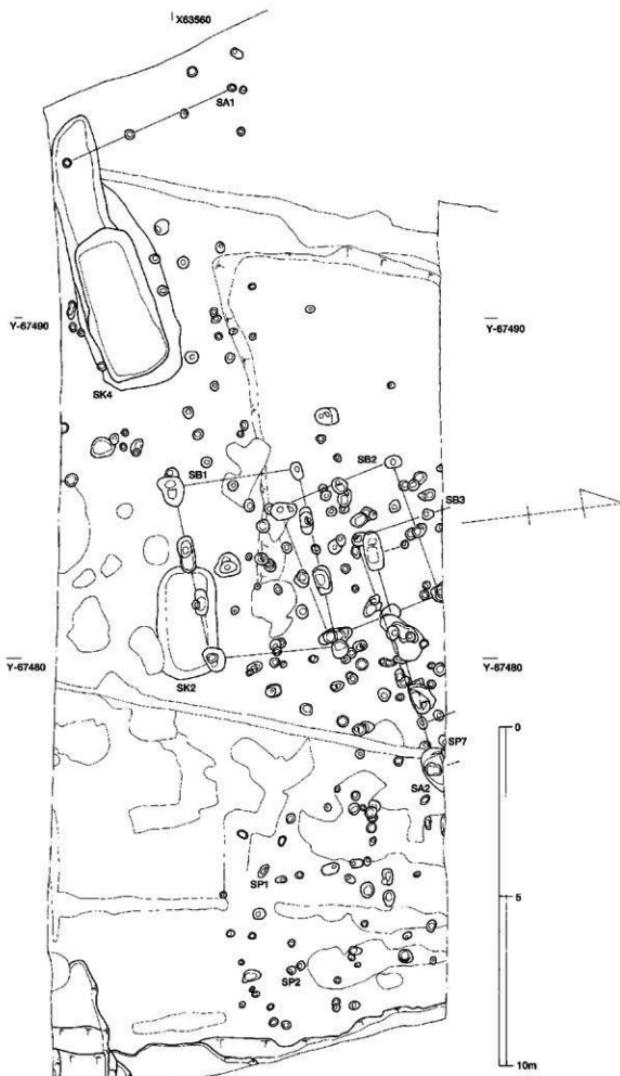
## VII 大塚遺跡第13次調査

### 1. 調査区全体の概要（第1図、第Ⅲ章第3図）

調査対象地は、今宿平野の中央南側、標高6m前後の低段丘上である。高祖山より北に派生する丘陵の北端付近であり、大塚遺跡の北部に当たる。13次調査地点は鉄塔の南～西部に位置するクランク状の調査区で、農道を挟んで北に6mのところに10次調査地点、段落ちの下、西に15mのところに12次調査地点（13次との間は削平により遺構が残っていない）、農道を挟んで東に10mのところに9次調査第3地点（旧河道内）がある。調査区東部のSK4付近が最高所となり、東西や北に向かって低くなる。遺構面である地山は上面が赤褐色～暗橙色ローム質で、その50cm前後以下で黄褐色粘質土や黄白色粘質土がみられる。地山の上の覆土は近現代の耕作に伴うと考えられる盛り土や耕作土で、20cm～60cm前後の堆積である。

遺構は調査区東部と西部に集中する傾向にあるが、全体的に密度はそれほど高くない。調査区東部では中世末の掘立柱建物4軒以上、方形堅穴状遺構を含む土坑2基などを検出し、調査区西部では平安時代末の掘立柱建物5軒以上、土坑13基などを検出した。調査区中央部付近はさらに遺構密度が薄く、中世末とみられる溝4条や土坑・井戸状遺構3基などを検出した。中世末は、大内氏による筑前支配の頃の農村集落とみられ、防長系足鍋の出土が示唆的である。平安時代末の建物は主軸方向が南北方向となるものが多く、柱穴の大きさも揃っており、一定の規制のもと集落が形成されている。怡土莊成立前後における稻田開発関係の集落ではなからうか。

本調査区は地点ごとに遺構の時期や様相が大きく異なる傾向にあるので、調査区内を東部、中央部、西部に分けて報告することとする。東部はSA1付近以東、中央部はSK8付近～SD4付近、西部はSB4以西である。空間の重複があるが、SB4は西の建物群と一緒に、SD1～4の溝群は中央部のところで報告することとする。



第3図 13次調査区東部平面図 (1/120)

## 大塚遺跡第13次調査

### 2. 調査区東部

#### 1) 概要 (第3図)

北西部や東部の擾乱や削平が著しいが、柱穴多数（掘立柱建物4軒以上、柱穴列1条）、方形堅穴状造構を含む土坑2基などを検出した。柱穴の覆土は地山ブロック土を多く含む暗褐色土が主体で、柱を抜き取ってから人為的に埋め戻されたものが多いとみられる。暗黒褐色土の多い調査区西部の造構覆土とは異なっており、時期差を示すものと思われる。調査区南東部にはスロープ状の落ち込みがあり、中世末の遺物等を包含する暗茶褐色土を覆土とするが、より新しい時期のものである可能性が高いと考える。遺物は方形堅穴状造構のSK4を中心にコンテナケース2箱分ほどの出土である。明代の青花磁、青磁、白磁、李朝陶器、土師皿、土師質鍋、瓦質足鍋、須恵器擂鉢、範状青銅製品などが造構に伴う遺物で、その他擾乱などから土錐（中世）や古墳時代後期の須恵器などが出土している。造構、遺物の中心は15世紀後葉～16世紀前半とみられる。

#### 2) 造構

##### ①掘立柱建物、柱穴列 (第4～5図)

**S B 1** 2間×3間のやや不整な建物で、3.7m×5.2mを測る。屋内棟持柱を有するタイプか。S B 2を切るが、SK2との切り合いは不明である。柱痕は柱穴6でのみ確認できた。柱の直径は20cm前後とみられる。柱穴1は、下層に礫を多量に含んでいて、比較的遺存の良い土師皿（22）が出土した。

**S B 2** 2間×2間で、3.6m×4mを測る。SB1やSA2に切られる。柱痕はみられない。柱穴3では中央から一抱える礫が出土しているが、根石を思わせる出土状況ではなかった。建物と関係のある礫としても、原位置からは動いているとみられる。

**S B 3** 北側は調査区外であるが、2間×3間の側柱建物と考えられる。桁行5.6mを測る。SA2に切られる。SB2と重複するが前後関係は不明である。軸の方向はSK4やSA1と合うように見える。柱痕は明確でない。

**S A 1** 3間以上的一条の柱穴列で、長さ5.4mを測る。西部が調査区外となる建物の可能性もある。覆土はいずれも暗灰色粘土質土主体の單一層である。SK4と重複する柱穴は、SK4床面での検出であるが、他の柱穴よりもSK4の分だけ深くなっている、SK4の廃絶後すぐに掘りこまれたものか。

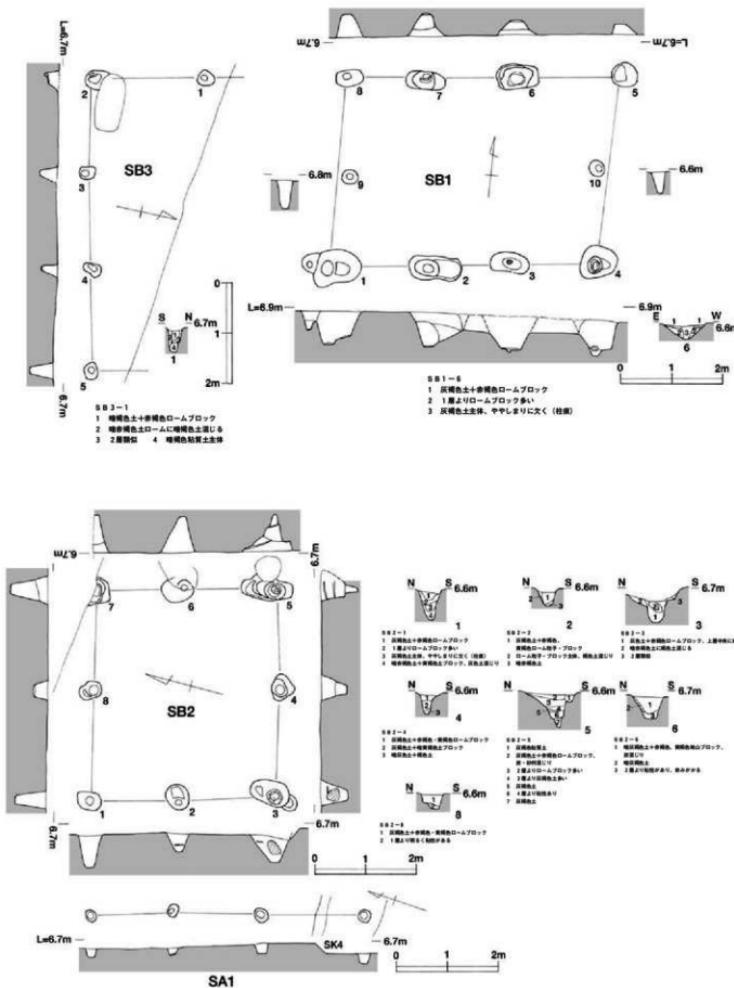
**S A 2** 3間以上的一条の柱穴列で、長さ6.6mを測る。掘り方が他の柱穴よりも大きく、当初は土坑と認識していた。北部が調査区外となる2間×3間の建物になる可能性がある。SB2とSB3を切る。柱痕はなく、抜き取られているが、掘り方からみて柱の直径は20cm前後とみられる。柱穴3からは、固化に耐えないものであるが足鍋小片が出土している。

##### ②土坑 (第6図)

**SK 2** 長軸長3.3m、短軸長1.8m、深さ0.32mの隅丸長方形をなす。覆土上層は砂利混じりの暗灰色土、下層は地山土ブロックを多く含む褐色土であり、人為的な埋戻土の可能性が高い。遺物は少量であるが、明代の青磁などが出土している。造構の性格は定かでないが、ゴミ穴といった風ではなく、簡易な貯蔵施設といったところであろうか。

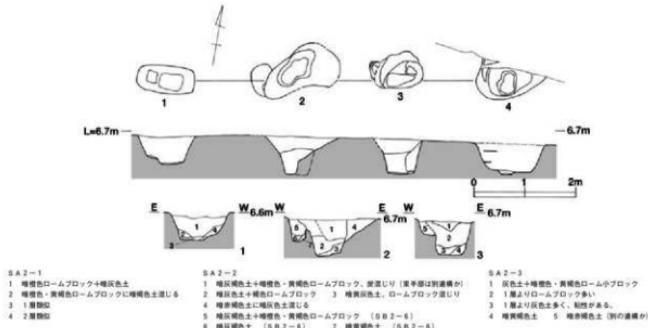
**SK 4** 検出状況は8.2×2.8mの溝状であったが、東部が4.5×2.1mの略長方形の一段深い落ち込みと

大塚遺跡第13次調査



第4図 SB1、2、3、SA1 実測図 (1/80)

## 大塚遺跡第13次調査



第5図 SAKA 2 実測図 (1/80)

なる。この長方形部の掘り方底面の深さは検出面から0.72mで、床面には5cmほどの厚さで灰褐色粘土が貼られていた。関連遺構として土坑内や周辺の柱穴にも注意を払ったが、関連のありそうなものはみられなかつた。遺構西部の長さ3.6m、深さ0.2m強のテラスについては、遺構掘削時の作業場かつ遺構機能時のステップと考えられる。覆土は灰褐色土が主体で、壁際以外では地山土の混じりも多いので、遺構の埋没は基本的に自然経過によるものとみられる。以上の様相からみて本遺構は方形堅立状遺構の1種であり、機能としては地下式貯蔵施設の可能性が高いとみられる。遺構の東部からは礫がまとまって出土しているが、出土状況からみて石組みのようなものではなく、埋没過程において東側より投棄されたものである可能性が高いとみている。礫は被熱しているものが少なくない。遺物は次節でみるような陶器や土器がまとまって出土しているが、破損品ばかりである。遺構廃絶後はゴミ穴として利用されたのであろう。床面上から上層まで出土遺物に時期差は認められず、上層と下層で接合関係にあるものもある。

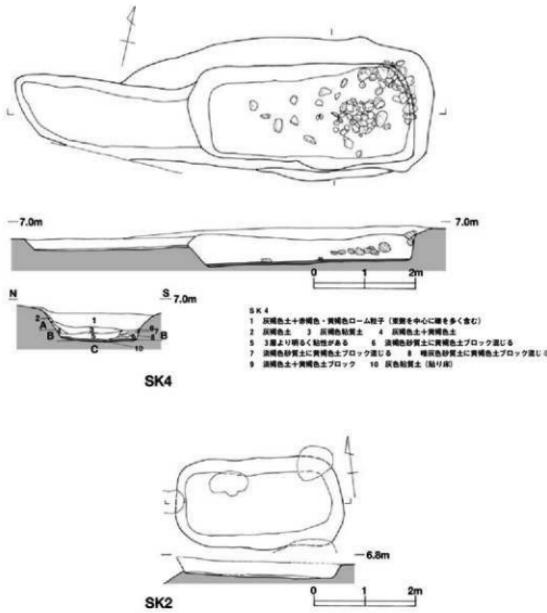
### 3) 遺物

#### ① SAKA 4出土の遺物 (第7図1~17)

今回の遺構出土遺物の中では最もまとまった資料で、15世紀後葉~16世紀前半に位置づけられる。防長系の足鍋がまとまって出土しており注目される。以下、当該期の陶器の分類については、「貿易陶磁研究」2(1982年)の小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」、森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」や、博多出土貿易陶磁分類表によることとする。

1~3は景徳鎮窯系青花磁である。1は口縁部内外面に界線、胴部外面に蓮弁文、見込に花文の施される碗V類である。2は外面に芭蕉葉文が施される碗I類とみられる。3は比較的法量の大きい皿とみられる。4~7は龍泉窯系青磁V類の碗・皿である。釉の色調がにぶい緑青色のものが多いが、口縁部に列点文のある4は透明な淡緑色をなし、胎土も精良である。碗の高台内面の釉は部分的に省かれている(6, 7)。幕筒底皿の5の底部内外面には褐色粘土の目跡が残る。8~10は李朝稚軸陶器の碗・皿である。砂粒の目立つ灰白色の胎土で全面にオリーブ灰色の釉が施される。口縁部付近の破片にはハケメ調整状の条線がある。11~14は瓦質土器の足鍋である。

## 大塚遺跡第13次調査



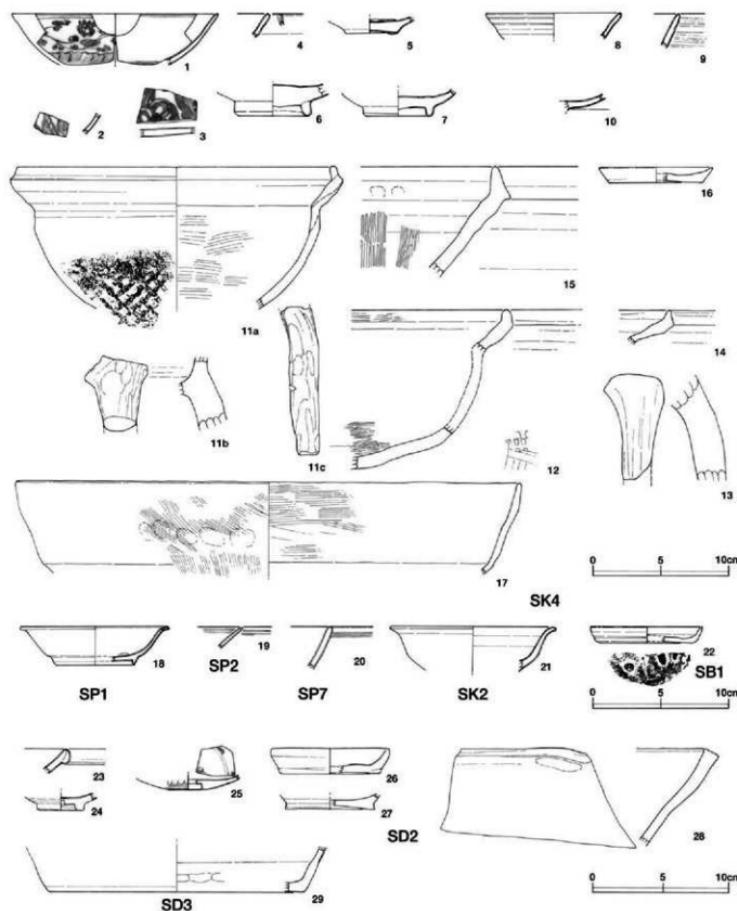
第6図 SK 2、4 実測図 (1/80)

11a、b、cは同一個体であるが接合せず、外形の復原も困難であったので別々に図示している。受口状口縁をなし、胴下部には一次調整の粗い格子叩き目がみられる。胴部と足はそれぞれ別作りしたものをナデ付けたものとみられる。外面には煤が付着する。15は須恵器質の擂鉢である。16は土師皿である。回転糸切底か。復原による法量は器高1.1cm、口径8.1cm、底径6.8cmを測る。胎土中にシャモットを多く含む。17は土師質器の鍋である。口縁周り1/10程度の破片であるが、復原径は36.8cmを測る。

### ②その他の遺構出土遺物（第7図18～22、第18図53）

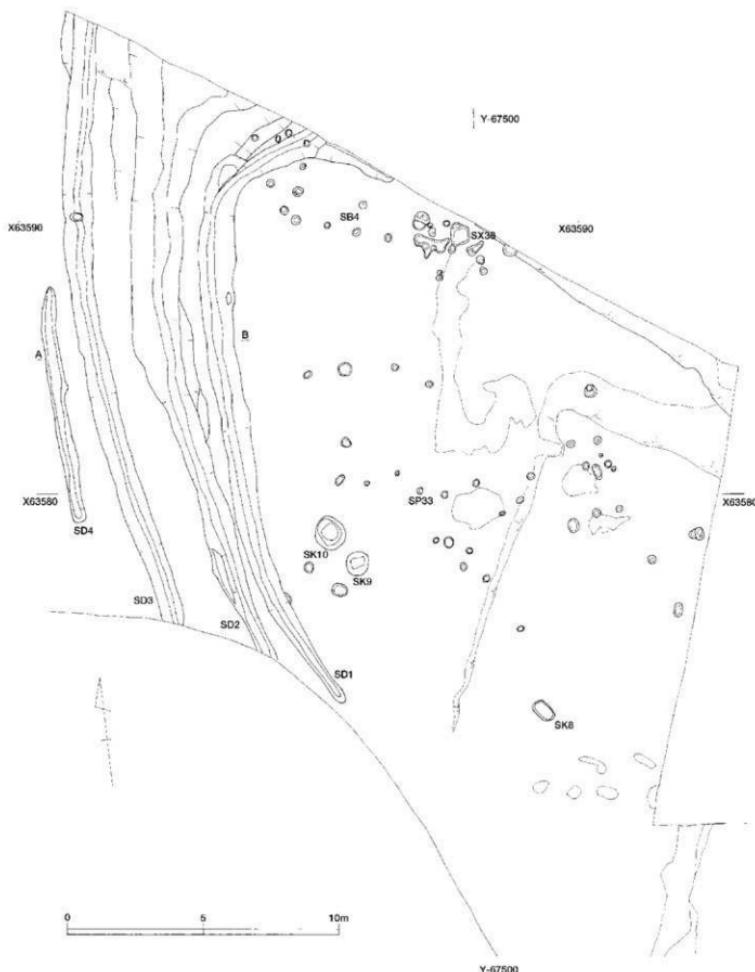
18はS P 1出土の中国白磁皿E-2類である。見込に目跡を残す。19はS P 2出土の景德鎮窯系青花磁である。口縁部内外面に界線が施される。このS P 2からは第18図53の青銅製品も出土している。遺存状況が非常に悪い。横断面が扁平な板状で、一方に向かって幅が狭まる。長軸方向に湾曲しているが、土圧による変形の可能性もある。小型の匙や箆、耳搔、簪といったところか。20はS P 7出土の龍泉窯系青磁V類の椀で、口縁部下に線彫りによる界線がある。釉色は暗い青緑色である。

大塚遺跡第13次調査



第7図 遺物実測図① (調査区東部の各遺構とSD2、3) (1/3)

大塚遺跡第13次調査



第8図 13次調査区中央部平面図 (1/150)

## 大塚遺跡第13次調査

21はSK2出土の龍泉窯系青磁V2類の椀で、釉色はにぶい淡青緑色である。22はSB1の柱穴1出土の土師皿である。復原による法量は器高1.2cm、口径8.2cm、底径6.8cmを測り、SK4出土の16とはほぼ同じである。回転糸切底の外面には、土器胎土と同じ粘土の目跡が残る。

### ③調査区南東端の包含層出土遺物（第17図49～52）

上記の遺構などから流入したとみられる中世後半以降の遺物が出土している。49は瓦質土器の足鍋で、SK4出土のものと同様の特徴をもつ。50は土師質土器の耳鉢である。51は丸瓦であるが、近世以降のものかもしれない。52は管状土錐である。エンタシス形の小型品で、長さ3.7cm、最大径1.3cm、重さ5.9gを測る。孔は貫通すると思われるが、鉄分が沈着しているようである。

### ④遺物の時期について

SK4出土土器は、山本信夫・山村信榮1997「九州・南北諸島（中世食器の地域性）」『国立歴史民俗博物館研究報告』71の中世V期（15世紀後葉～16世紀末）に位置づけることができる。定量的青磁碗と「染付C群」により構成される陶磁器組成は、續伸一朗1995「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』の第II期に該当し、16世紀前半が下限と考えられている。周辺の遺構から出土した土器・陶磁器もこれとはほぼ同時期とみて大過ないであろう。

## 3. 調査区中央部

### 1) 概要（第8図）

調査区中央部は西に向けて低くなる緩斜面で、周囲に比べて遺構密度はさらに薄い。時期不明（中世？）の土坑3基（2基は井戸か）、中世末以降の溝4条、平安時代末の柱穴（建物1軒以上）を検出した。中世の溝群が走る箇所は本来の谷状地形とみられる。調査区の北東部でも地山が北に向かって落ちるが、古い時期の包含層ではなく、近現代の盛土層により埋没している。SD1に切られる掘立柱建物SB4については、西部の建物群と一連のものとみられるので、次章で述べたい。遺物は溝や柱穴からごく少量の出土であるが、布目瓦もみられる。布目瓦の出土したSP33やSX38は建物を構成するものではないが、覆土は暗褐色土であり西部の遺構と共通している。

### 2) 遺構

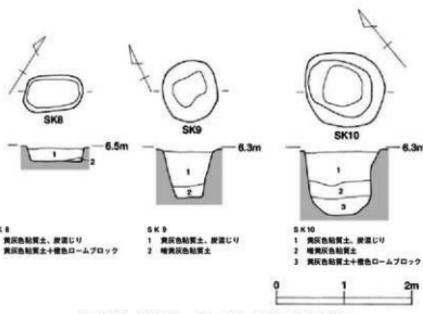
#### ①溝（第1、2、8、9図）

SD1～4 調査区中央部やや西のところで4条の溝を検出した。掘立柱建物のSB4を切るが、その溝に切られる柱穴底面のレベルが他の柱穴底面よりも低いことから、本来の谷状地形を利用して掘削された人工的な溝とみられる。中央のSD2が一番深い。両側のSD1や3などはSD2がある程度埋没してから掘削されたものとみられるが、上層まで埋没するのはほぼ同時とみられる。覆土は、いずれも灰色味の強い粘質土が主体である。SD1からSD4までの東西幅は7.1mあり、SD2底面の標高は南端で6.3m、北端で4.8mとなる。これらの溝の機能は、南から北に向けて導水する用水路であろう。遺物はSD2とSD3から少量出土しているが、明代の青花磁などを含んでおり、調査区東部の遺構と近い時期になるとみられる。



第9図 SD1～4 土層図 (1/80)

## 大塚遺跡第13次調査



第10図 SK 8, 9, 10 実測図 (1/60)

### ②土坑 (第10図)

SK 8 上場の平面 $0.84 \times 0.52$ mの隅丸長方形、深さ0.23m。周間に遺構がみられない箇所にある。

SK 9 上場の平面は径 $0.8 \sim 0.9$ mの不整円形で、深さは0.73mある。底面付近で湧水がある。SK 10が近在する。

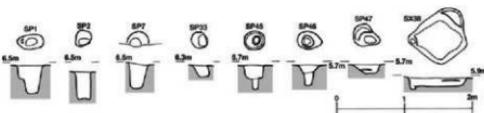
SK 10 上場の平面は径 $1.1 \sim 1.3$ mの不整円形で、深さは0.97mある。底面付近で湧水がある。SK 9に近接しており、SK 9を一回り大きくしたような遺構である。

上記の土坑はいずれも覆土が淡い黄灰色粘質土主体となっており、遺物が全く出土しない。SK 9や10は小規模な井戸の可能性が考えられる。時期については推定し難いが、調査区東部の建物等と近い時期、もしくは更に新しいものであろうか。

### 3) 遺物

#### ① SD 2, 3 出土の遺物 (第7図23~29)

23~28はSD 2出土の中世土器・陶器であるが、遺構の時期を示すのは中世末の26~28である。23は中国白磁IV類碗で、口縁部が厚みのある玉縁となる。図示部全面に濁白色の釉がみられる。24もIV類の白磁皿とみられる。外面上端の一端と見込に黄茶味を含む白色釉がみられる。胎土中に砂粒が目立つ。23と24は平安時代末の調査区西部の遺構などから混入したものとみられる。25は景德鎮窯系青花磁である。外面に鋸歯状の芭蕉葉文と界線、見込に界線と花文の施される基筒底の皿I類である。「染付皿C群」に当たる。26と27は土師皿である。回転系切底か。復原による法量は、前者が器高19cm、口径8.6cm、底径7.3cmで、後者が底径6.6cmである。28は土師質土器の片口鉢である。内外面ナデ調整である。29はSD 3出土の中世須恵器の壺である。被熱により器表の大部分が剥離している。内底面側縁に沿って工具によるオサエ痕がみられる。



第11図 報告遺物出土の小ピット等 (調査区内各所) (1/60)

## 大塚遺跡第13次調査

### ②S P33、S X38出土の遺物（第16図37・38）

37はS P33出土の平瓦である。凸面は斜格子目タタキの後にケズリ状のナデが施され、凹面には布目痕がみられる。図の下部は狹端面でケズリ調整されている。図の右は側面で、凹面側縁から中程まで切り込みを入れてから折り取っていることが分かる。38はS X38出土の平瓦である。表面の摩滅が著しいが、凹面には布目痕が残る。図の下部は狹端面、図の左が側面であり、37と同様の技法であろう。37と38はいずれも中世前半が下限で、調査区西部の遺構と同時期かそれよりも古いものとみられる。この種の瓦は隣接する今宿五郎江遺跡の調査で比較的まとまって出土しているので、そこから二次的にもたらされたものである可能性が高い。

### ③鉄製品（第18図6）

56は調査区北端部の落ちから出土した鉄釘である。時期は不明。

## 4. 調査区西部

### 1) 概要（第12図）

柱穴の数や遺構の切り合いはあまり多くないものの、掘立柱建物5軒以上、土坑13基などを検出した。遺構覆土は黒褐色～暗褐色土のものが多い。柱穴は全体的に小規模であるが、2間×5間の総柱建物もみられる。建物や土坑は主軸が現在の磁北と合うものが多い。土坑の一部は墓葬の可能性がある。これらの建物柱穴や土坑から出土した遺物は極少量である。覆土の共通するピット出土の遺物なども併せてみてみると黒色土器、土師器、須恵器甕などがあり、糸切底の土師皿小片が出土した土坑もある。遺構分布や遺物からみて、平安時代末の比較的短期の時期幅におさまるとみられる。

### 2) 遺構

#### ①掘立柱建物（第13、14図）

**S B 4** 北側の一部が調査区外になるが、3間×4間の建物となろうか。2.9×4.5mを測る。覆土はいずれも暗褐色土の單一層で柱痕は検出できなかった。前述の通り、SD 1に切られる柱穴は底面のレベルが他の柱穴よりも低くなってしまっており、本来の地形を示すものとみられる。建物の軸線方向は磁北等とは合ってこない。地形的制約によるためであろう。

**S B 5** 2間×3間の建物で、中央長軸方向の柱筋は通るが短軸方向は通らない。総柱建物ではなく、屋内に棟持柱をもつ隅柱建物とみられる。3.4×5mを測る。周辺は複数棟重複している可能性があるが、確実なものを示すにとどめる。柱痕は柱穴5、6、9、10、12で確認できた。柱の直径は10cm程度とみられる。柱穴底面のレベルは北部が20cmほど低くなってしまっており、これも本来の地形を示すものかもしれない。建物の軸線方向は磁北よりやや西に偏っている(N11°W)。

**S B 6** 北側が調査区外になるが、2間×3間または3間×4間の建物になるとみられる。3.7×4.4mを測る。覆土はいずれも暗褐色土の單一層で柱痕は確認できなかった。建物の軸線方向は磁北に近い。

**S B 7** 2間×5間の総柱建物で、3.5×9.7mを測る。建物の軸線方向は磁北と合う。同様の主軸方向をとるSK13～15と重複するが、SK13に切られることを確認した。柱痕は柱穴4、9、18で確認できた。柱の直径は10cm程度である。柱間寸法は梁間が1.8m前後、桁間が2m前後である。総柱建物であるが、建物の平面規模に比べて柱や柱穴が著しく小さいことから、高床ではなく、長屋風の平屋建物であった可能性が高いであろう。

## 大塚遺跡第13次調査

**S B 8** 北西隅が後世の段落ちにより削平されているが、2間×3間の建物である。3.65×5.4mを測る。建物の軸線方向が磁北と合い、南側の妻はS B 7とはばらう。同様の主軸方向をとるS K11と重複するが、先後関係は不明である。柱痕は柱穴1、2、5、6で確認できた。柱の直径は10cm程度であろう。

### ②土坑（第15図）

S K11～17は主軸方向が磁北に近い隅丸長方形の土坑である。互いに切り合いはないが、掘立柱建物を切るもののがみられる。覆土は暗黒褐色土を主体とし、下層に地山ブロックを多く含むものが多い。出土遺物や土層の裏付けがないが、掘り方の特徴は土壙墓のようである。長軸長は1.1mから2.4mまではあるが、1.1m程度の小型であっても、横幅や深さは大型のものとほとんど変わらない。

**S K11** 上場が平面1.6×0.86mの隅丸長方形で深さは0.15mを測る。下場は南側に向かって幅が狭まり、レベルも高くなる。主軸方向は磁北と合っている。S B 8と重複するが先後関係は不明である。

**S K12** 上場が平面1.3×0.6mの略長方形で、深さは0.24mを測る。下場は北に向かって狭まる、主軸方向は磁北と合っている。

**S K13** 上場が平面2.08×0.7mの細長い隅丸長方形で、深さは0.3mを測る。底面はやや凸凹がある。S B 7の柱穴を2基切る。主軸方向は磁北よりやや西に偏る。

**S K14** 上場が平面1.4×0.68mの隅丸長方形で、深さは0.3mを測る。主軸方向は磁北よりやや西に偏る。S B 7と重複するが先後関係は不明である。

**S K15** 上場が平面1.12×0.76mの台形に近く、深さは0.36mを測る。主軸方向は磁北よりやや東に偏る。S B 7と重複するが先後関係は不明である。

**S K16** 上場が平面2.4×0.75mの細長い隅丸長方形で、深さは0.16mを測る。下場は北側がやや幅広く、レベルが低い。主軸方向は磁北よりやや東に偏り、S K15と合っている。S B 6に近接するが先後関係は不明である。

**S K17** 上場が平面1.1×0.76mの隅丸長方形で、深さは0.3mを測る。主軸方向は磁北と合っている。

**S K19** 上場が平面1.56×0.7mの小判形で、深さは0.18mを測る。覆土は暗黒褐色土の単一層で、底面には小ビットが4基ある。主軸方向は東西方向であるが、磁北等と合うものではない。出土遺物は弥生土器（39・40）のみであるが、混入の可能性が高いとみている。

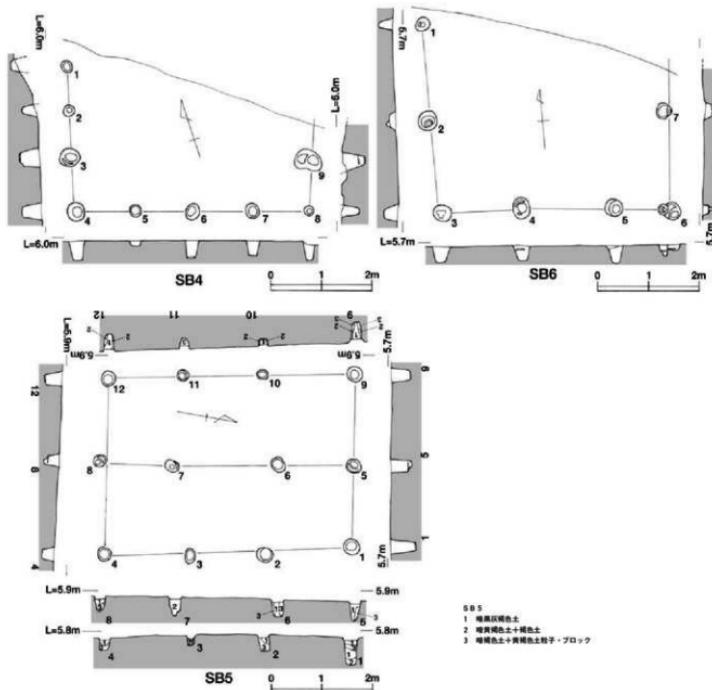
**S K21** 上場が平面0.98×0.56mの小判形で、深さは0.2mを測る。覆土は暗黒褐色土の単一層である。S B 6と重複するが、先後関係は不明である。主軸方向は東西方向であるが、磁北等と合うものではない。S K19に近接し、方向も近い。





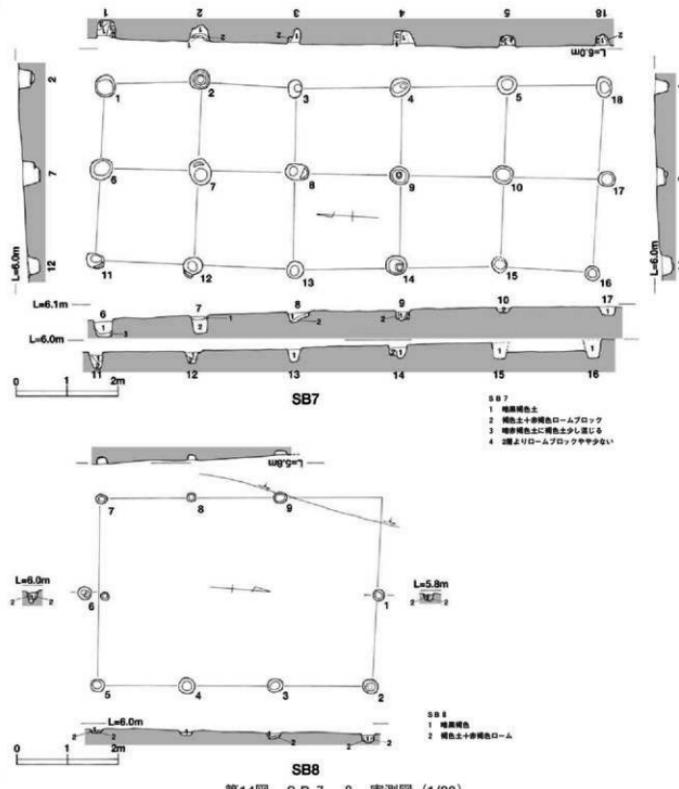
第12図 13次調査区西部平面図 (1/120)

大塚遺跡第13次調査



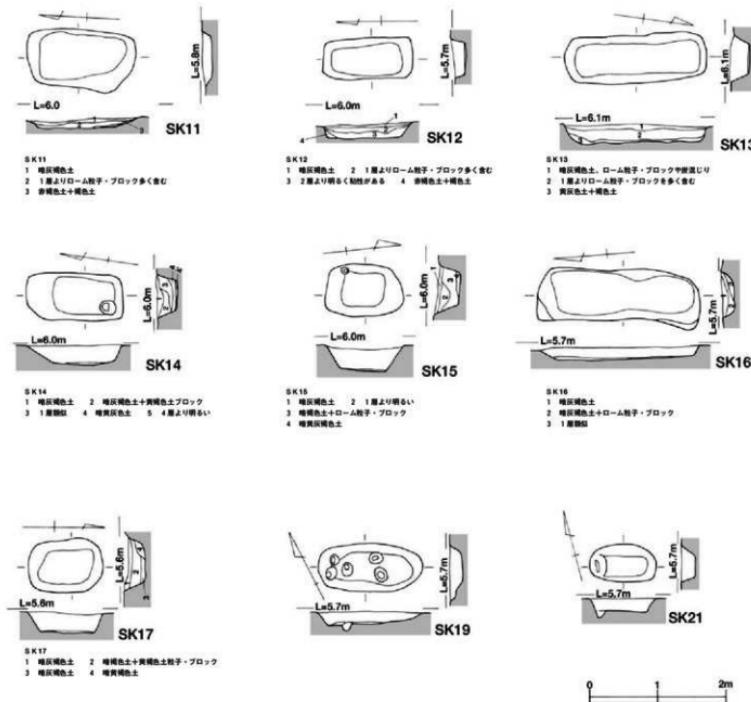
第13図 SB 4、5、6 実測図 (1/80)

大塚遺跡第13次調査



第14図 SB 7、8 実測図 (1/80)

## 大塚遺跡第13次調査

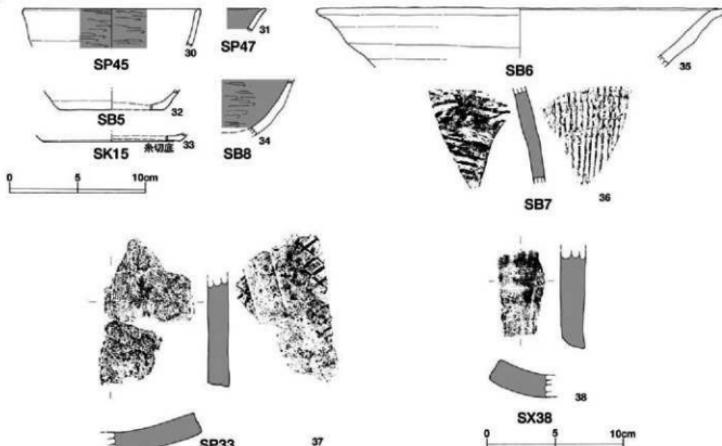


第15図 SK11~17、19、21 実測図 (1/60)

### 3) 遺物 (第16図 30~36、第18図54・55)

30、31、34は黒色土器である。30はS P45出土の黒色土器B類（両黑）の椀である。31はS P47出土の黒色土器A類（内黒）の口縁部小片である。34はS B 8 柱穴 6 出土の黒色土器A類椀の胴部破片である。32、33、35は土師質土器である。32はS B 5 柱穴 1 出土の土師壺である。ヘラ切り底であろう。33はS K15出土の土師壺である。回転糸切り底である。35はS B 6 柱穴 7 出土の大型土師質土器

## 大塚遺跡第13次調査



第16図 遺物実測図②（調査区西部と中央部の各遺構）(1/3)

である。遺存率が低いため、傾きや法量は不確かであるが、大型鉢ないしは鍋に該当するとみられる。36はS B 7柱穴12と柱穴14から出土した須恵器壺胴部片である。天地と傾きは定かでない。外面は擬格子目タタキで、内面に當て具痕を残す。

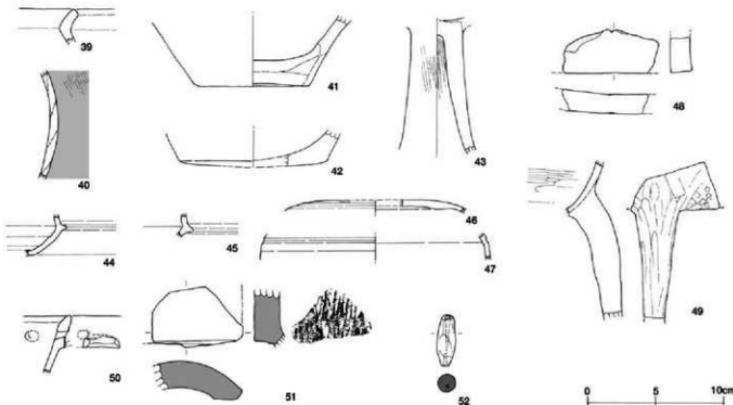
調査区西部の遺構は主軸に統一性があり、切り合いが少なく、出土遺物も極少量であるので、その営みは短期間であったものと思われる。33は回転糸切底の土師壺であるが、筑前地域では一般に12世紀以降と考えられている。黒色土器は口縁部の外反が顯著ではなく、一見古い型式であるように見えるが、中世Ⅰ期に位置づけることができる田村遺跡第4次調査S K45出土一括資料の黒色土器も口縁部がほとんど外反しない型式である。田村遺跡は後述のように平安時代の掘立柱建物のあり方が大塚遺跡のそれとよく類似する遺跡である。前述したSD 2出土の白磁IV類（第7図23・24）もこの調査区西部の遺構に近い時期のものである可能性が高いであろう。以上のような所見から中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀前半）を中心とするものであると考える。

土器以外では鉄製品が出土している（第18図54・55）。54はS P 46出土。鉄鎌の先端部付近か。55はS B 5の北東付近の遺構面から出土。鍛造の跡先とみているが、2個体の鉄片が重なったものである可能性もある。

### 5. 古墳時代以前の遺物（第17図39～48）

39～43は主に調査区の西部から出土した弥生土器である。いずれも遺存状況が悪く、二次的な流入を思わせる。39、40はS K19出土で、同一個体の可能性がある。40は胴部片で傾きは定かでない。外

大塚遺跡第13次調査

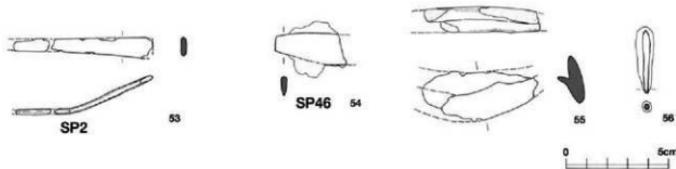


第17図 遺物実測図③(遺構にともなわないもの)(1/3)

面に赤彩の痕跡があり、調整はハケメの後にミガキであろう。内面はナデである。39は器表が風化しており赤彩の有無は不明。色調はにぶい橙色を呈する。41は表土出土の壺または壺の底部。器壁が厚い。器面調整は不明。42はS B 7出土の壺または壺の底部。底外面が凸面気味の平底。43はS D 3出土の高杯脚部である。外面にハケメ調整痕、内面に絞り痕がみられる。これらの弥生土器は後期初頭～中葉におさまるものであり、今宿五郎江遺跡から二次的にもたらされたものとみられる。

44～47は調査区東部の擾乱から出土した古墳時代後期の須恵器である。44・45は返しのある坏身、46・47は蓋である。これらも今宿五郎江遺跡または大塚遺跡南部から二次的にもたらされたものであろう。

48は風化の進んだ土製品で判然としないが、埴輪であろう。S B 7柱穴2と柱穴5から出土したもののが接合する。図示した主面は内面で、図下部の端面が基部に当たるだろう。器面調整は不明。大塚古墳の薄手の一群とみられる。



第18図 遺物実測図④(青銅製品、鉄製品)(1/2)

## 大塚遺跡第13次調査

### 6. 大塚遺跡第13次調査のまとめ

本調査区の変遷を時期ごとにみていく。

弥生～古墳時代については遺物が少量があるが全て混入品とみられるので、当該期は集落域の外れとみられる。奈良時代や平安時代前半については遺物もみられない。

集落の出現は平安時代末（11世紀後半～12世紀前半）になってからで、調査区西部を中心に掘立柱建物などが展開する。建物は主軸方向が南北方向となるものが多いが、磁北に合うもの（SB6・7・8）と磁北より10°ほど西偏するもの（SB5）に分かれ。仮に前者をA群、後者をB群とすると、A群は12次調査の建物や10次調査の建物群の一部と方向が合い、B群は9次調査第5地点の建物群や10次調査の一部と方向が合っている（第III章3図）。建物の中には2間×5間の総柱建物であるSB7があるが、柱穴は全て小さく、床束を含まないと考える。建物は全て平屋であろう。

これらの建物とは別に、隅丸長方形の土坑が分布しており、これも主軸方向が磁北に合うものが多い。方向や分布域がA群建物と重なるので、建物に隣接する土坑である可能性も考えられたが、周辺の調査地点では建物内に土坑のあるものがみられないで、建物とは関係の薄い遺構と考える。建物柱穴と切り合いがあるものはSK13のみで、SB7よりも新しい。SK15から糸切底の壊が出土していることからも、この土坑群はより新しい一群であり、建物廃絶後に掘削されたのではなかろうか。建物群は連続的に営まれたと考えて、B群建物→A群建物→土坑群という遺構の変遷を想定しておきたい。土坑は掘り方などからみて土葬墓と考えているが、副葬品はみられない。

9次第5地点、10次、12次、13次調査地点といった、平安時代後半の掘立柱建物群が展開する大塚遺跡北端部は当該期に初めて集落が形成される地区であり、農田開発関係の集落を思わせる。糸島の皇室領園として有名な怡土莊（史料初見1131年）との関係が問題になってくるだろう。怡土莊の立莊当初は在地領主たちが庄政所を構成して在地支配に大きく関わるが、源平合戦後に平家との結びつきが強かった在地領主が没落して、中央権門（仁和寺）の直接支配が強まると思われる。集落は12世紀後半まで続かないともみているので、その廃絶は怡土莊支配の動向とはあまり関係ないかもしれない。13次調査の建物は、総柱建物の性格が定かではないが、いずれも「家」とみられ、「倉」はみられない。側柱建物であるが、9次や10次調査地点の2間×2間の建物が「倉」に当たるのであろうか。

大塚遺跡に近い例としては、田村遺跡の11世紀前後とされる集落があり、野芥莊との関連が指摘されている（田村遺跡4次調査他）。遺構密度が大塚遺跡より高いが、掘立柱建物のあり方などはよく類似している。

統いて長い空白期間を経て、台地上高所の13次調査区東部を中心として中世末（15世紀後葉～16世紀前半）の集落が形成される。掘立柱建物群や貯蔵施設のほか、調査区中央部付近には用水路とみられる溝群や井戸状遺構があり、この時期のものとみられる。内内氏の支配が筑前に及ぶ時代であるが、防長系足利のまとまった出土も、その支配の一端をうかがわせる。大塚古墳周辺の調査地点でもこの時期の遺構が多くみつかっており、掘立柱建物のほか、区画溝、柵、石組井戸などがある（大塚遺跡6次、7次、16次東部）。大塚古墳の位置する丘陵尾根の東半部を中心と展開するようである。今宿平野東部における当該期の拠点的な集落と考えられる。

平成21年1月より、13次調査区の南隣地5000m<sup>2</sup>ほどの調査を行っている。これによって、大塚古墳より北の地区はその全容がほぼ明らかになるだろう。

## 大塚遺跡第13次調査写真



1. SB7, SB8周辺 (北から)

大塚遺跡第13次調査

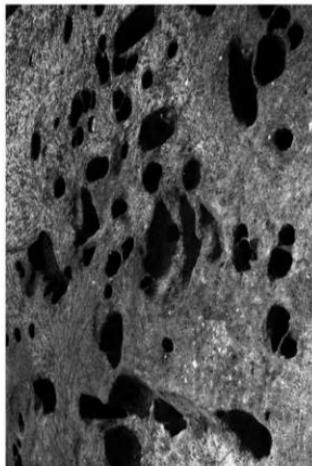


2. 調査区全景（南からラジコン撮影）

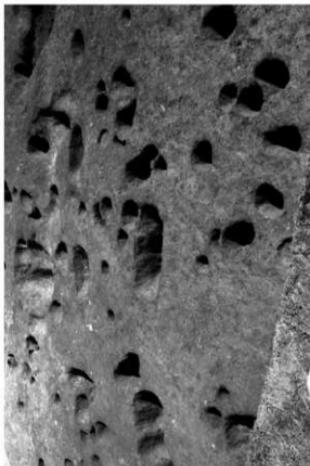


3. 調査区東部全景（ラジコン撮影）

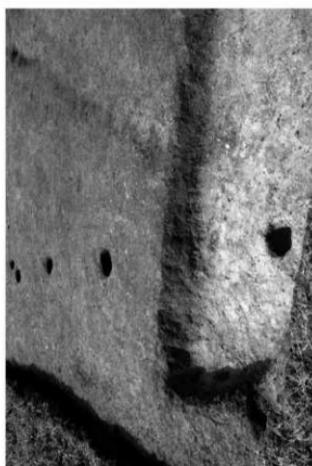
大塚遺跡第13次調査



4. SB1 (東から)



5. SB2 (北から)

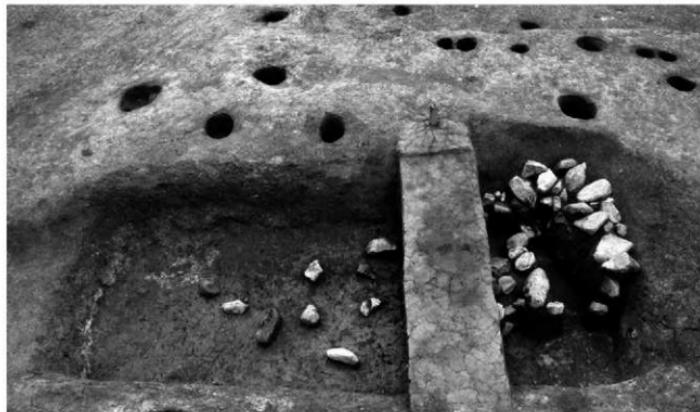


6. SA1 (南から)



7. SK2周辺 (南から)

大塚遺跡第13次調査



8. SK 4 (縫の出土状況と貼床面、南から)

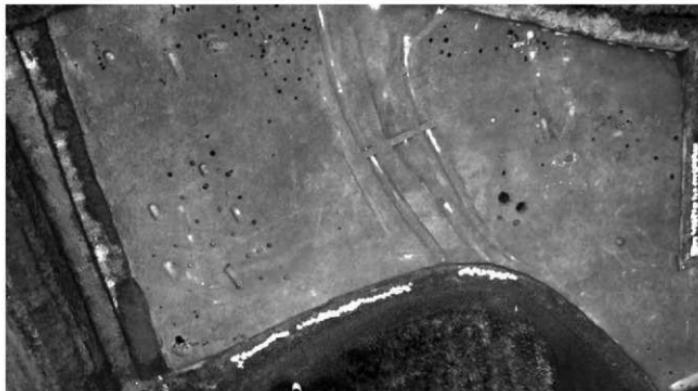


9. SK 4 土層堆積（西から）



10. SK 4 (貼床面と西テラス、東から)

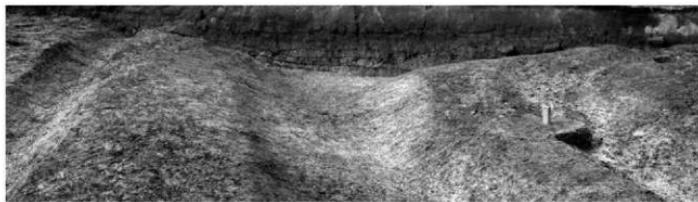
大塚遺跡第13次調査



11. 調査区中央部と西部全景（ラジコン撮影）



12. SD 1～4（南から、写真中央の奥は今山）

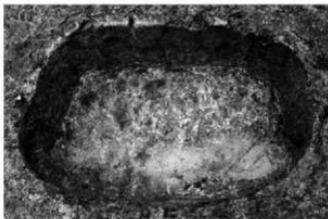


13. SD 2周辺調査区北壁（南から）

大塚遺跡第13次調査



14. SK 8 土層堆積（南西から）



15. SK 8 完掘（南西から）



16. SK 9 土層堆積（南から）



17. SK 9 完掘（北から）



18. SK 10 土層堆積（南から）

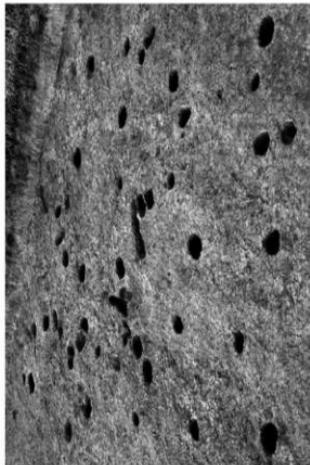


19. SK 10 完掘（北から）

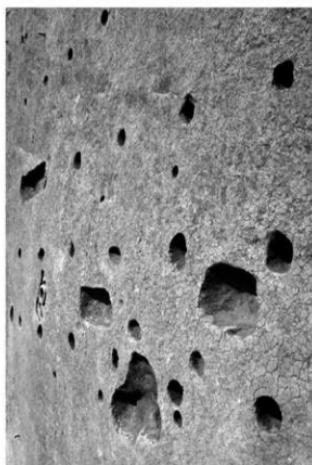
大塚遺跡第13次調査



20. SB 4 (北西から)



21. SB 5 (南から)

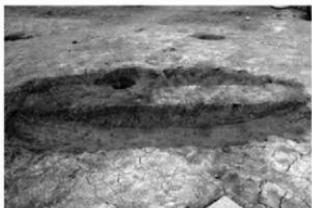


22. SB 7 (北から)



23. SB 8 (南から)

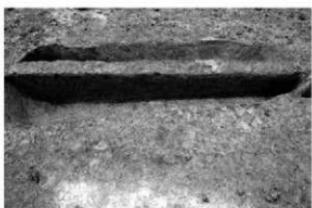
大塚遺跡第13次調査



24. SK11土層堆積（西から）



25. SK12土層堆積（西から）



26. SK13土層堆積（東から）



27. SK14土層堆積（南から）



28. SK15土層堆積（北から）



29. SK16土層堆積（南から）



30. SK17土層堆積（北から）

大塚遺跡第13次調査



31. SK 12完掘（南から）



32. SK 13完掘（北から）



33. SK 14完掘（南から）



34. SK 16完掘（南から）

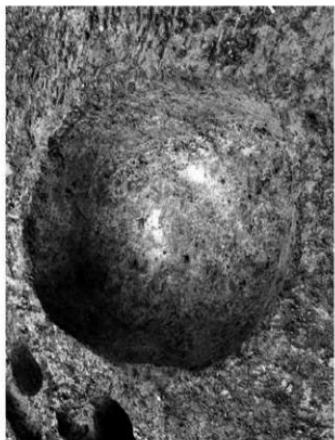
大塚遺跡第13次調査



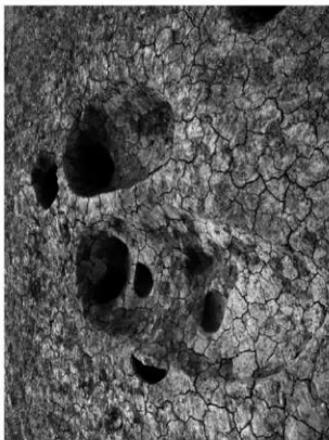
35. SK 11完掘 (南から)



36. SK 15完掘 (写真右が南)

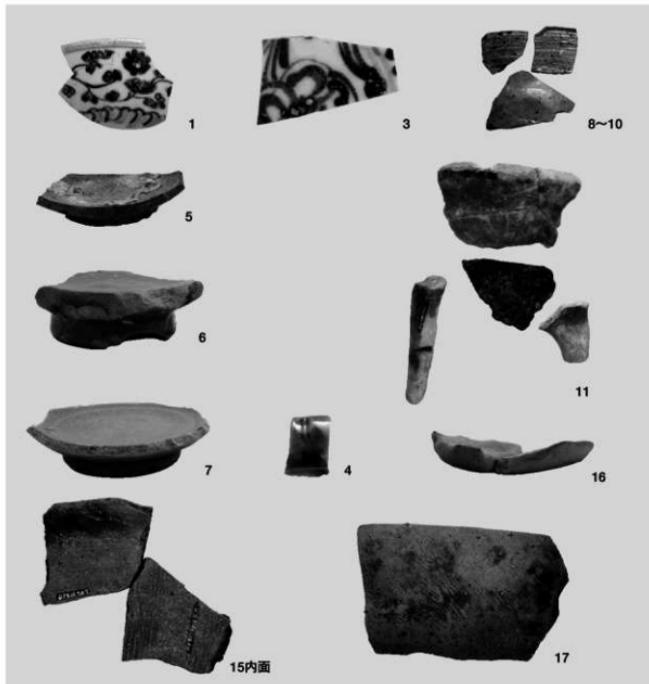


37. SK 17完掘 (写真右が南)

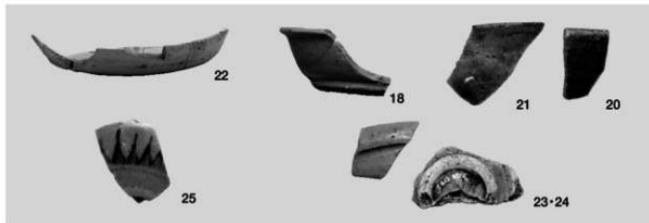


38. SK 19、21完掘 (写真右が東)

大塚遺跡第13次調査

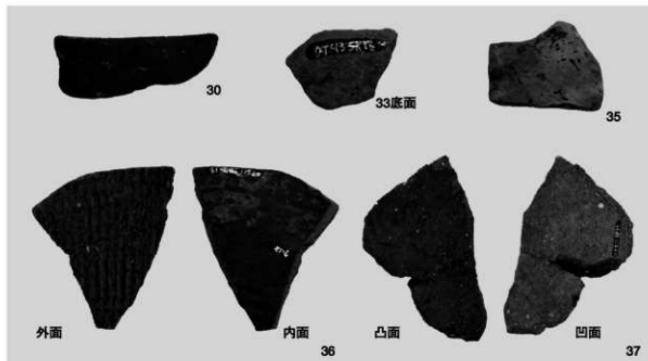


39. SK 4 出土遺物

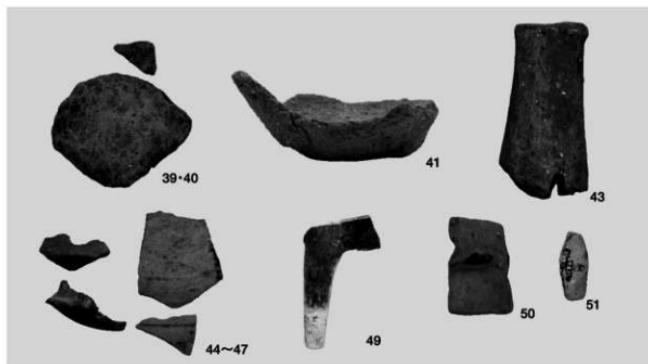


40. 調査区東部遺構、SD2出土遺物

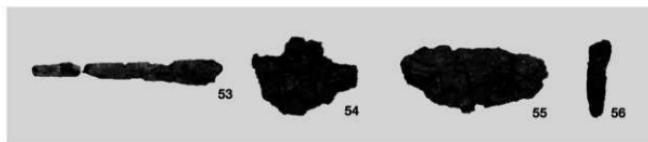
大塚遺跡第13次調査



41. 調査区西部出土遺物



42. 遺構に伴わない遺物



43. 13次調査出土金属器

## VIII. おわりに

本書で報告した大塚遺跡第8、10、12、13次調査の成果から、大塚遺跡北部の様相について簡単にまとめておきたい。主要な遺構の配置についてはⅢ章第3図に示した通りである（9頁）。

### ①弥生時代・古墳時代

10次調査のSK069からは弥生時代後期の土器がまとまって出土しているが、土師器・須恵器も出土しており、遺構の時期は下るとみられる。13次調査でも弥生後期の土器や古墳後期の須恵器などが出土地しているが、遺構の時期を示すものではないだろう。周辺には弥生時代後期前後の環濠集落である今宿五郎江遺跡や、古墳時代後期前半の大塚古墳などがあるが、大塚遺跡北部は基本的に当該期集落等の分布圏外となっている。

### ②古代

奈良時代前後の遺構は明確でないが、焼土坑である10次調査SK046はこの時期の製鉄に関連する炭焼施設である可能性がある。大塚遺跡14次・15次調査（未報告）などでこの時期の製錬炉、横口付炭焼窯、焼土坑などがみつかっており、大塚遺跡における古代製鉄の営みが明らかになっている。

大塚遺跡北部でまとまった集落の形成がみられるようになるのは平安時代になってからである。9次第5地点（未報告）、10次、12次、13次調査西部では主軸を南北方向に揃えて整然と並ぶ掘立柱建物群がみつかっている。建物の中には四面庇付建物（12次）や2間×5間の縦柱建物（13次）があるが、柱穴の規模などから建物はいずれも平屋であろう。また、建物と主軸方向の近い土坑が12次調査区西部や13次調査区西部に分布しているが、こちらは土壌墓の可能性が高いとみられる。12次調査SK03から鉄製刀子が、同SK04から土師器壺が出土しており、いずれも副葬品と考えられる。南北方向の建物は、磁北にほぼ合うもの（A群：10次SB101・102、106、12次SB19、13次SB6・7・8）と磁北より10°ほど西偏するもの（B群：9次第5地点、10次SB103、104、105、107、13次SB5）に分かれる。また、南北方向の土坑は主軸方向や分布域がA群建物に近く、13次調査区では重複している（SB7-SK13）。平安時代の遺構は配置や出土遺物の少なさから比較的の短期間に営まれた印象を受けるが、その時期が問題である。

遺物は、10次調査や12次調査で土師器壺、皿、須恵器壺、黒色土器A類・B類などが比較的まとまって出土しており、10～11世紀代のものである。中でも方形土坑の10次SK004の出土遺物は多く、10世紀前半を下らないものであろう。一方、13次調査では糸切底の壺や白磁なども出土しており、遺構の時期は平安時代末を中心という所見であった。

平安時代の掘立柱建物群が展開する大塚遺跡北部は、基本的に当該期から集落が形成される地区であり、整田開発関係の集落を思わせる。大塚遺跡に近い例としては、田村遺跡の11世紀前後とされる集落があり、野芥荘との関連が指摘されている（田村遺跡4次調査他）。遺構密度が大塚遺跡より高いが、掘立柱建物などの様相はよく類似している。大塚遺跡の掘立柱建物群を考えるうえでは、糸島の皇室領莊園として有名な怡土莊（史料初見1131年）との関係も検討課題になってくるだろう。また東隣の今宿五郎江遺跡からは近年の調査で10世紀前後の中国陶磁器、瓦などを多量に含む遺物がまとまって出土しており、付近に大宰府の外郭関連施設が存在した可能性が考えられるようになってきた。大塚遺跡10次SK004等はその時期の遺構と関係してくる可能性もあるだろう。

### ③中世

大塚遺跡北部では、鎌倉時代や室町時代の遺構・遺物は基本的にみられず、長い空白期間を経てから中世末（15世紀後葉～16世紀前半）の集落が形成される。当該期の遺構は13次調査区東部が北限となっている。13次調査では掘立柱建物群や貯蔵施設のほか、調査区中央部付近には水路とみられる溝群や井戸状遺構があり、この時期のものとみられる。大塚古墳周辺の調査地点でもこの時期の遺構が多くみつかっており、掘立柱建物のほか、区画溝、柵、石組井戸などがある（大塚遺跡6次、7次、16次東部）。平成21年1月より調査を行っている17次調査地点（13次の南側）でもこれらと連続する遺構の展開がみられ、溝や柵などにより区画された複数の屋敷・居館の分布が明らかになりつつある。当該期の集落は大塚古墳の位置する丘陵尾根の東半部を中心とし立地しており、今宿平野における拠点的な集落の一つとして位置づけることができるだろう。

大塚遺跡は伊都区画整理にともなう大規模調査によりその様相が著しく明らかになった。17次調査が完了すれば、大塚古墳より北はほぼ全面的に調査されたことになる。整理・報告はまだ途にいたばかりであり、本書が大塚遺跡の伊都区画整理にともなう調査報告として最初となる。検討課題が少なからず残っているが、遺跡北部の様相を概ね明らかにることができたのではないかだろうか。本書の調査地点では希薄であった弥生時代～古代前半についても重要な調査成果が蓄積しており、整理・報告を急がなくてはならない。

## 報告書抄録

書名	大塚遺跡 3		
ふりがな	おおつかいせき 3		
副書名	第8次・10次・12次・13次調査の報告		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	シリーズ番号	第1025集
編著者名	阿部泰之 今井隆博 森本幹彦		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	2009年3月31日		
住所・電話番号	〒810-0001 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667		
遺跡名	大塚遺跡		
ふりがな	おおつかいせき		
所在地	福岡市西区今宿町		
ふりがな	ふくおかしにしくいまじゅく		
市町村コード	40130	遺跡番号	0625
調査原因	土地地区画整理		
第8次調査			
地番	今宿町69-2他	調査面積	347m <sup>2</sup>
北緯	33° 34' 31"	東経	130° 16' 14"
調査期間	2005.06.10~2005.06.30		
第10次調査			
地番	今宿町345-1他	調査面積	2,789m <sup>2</sup>
北緯	33° 34' 30"	東経	130° 16' 13"
調査期間	2006.12.08~2007.03.14		
第12次調査			
地番	今宿町342-1他	調査面積	800m <sup>2</sup>
北緯	33° 34' 28"	東経	130° 16' 11.5"
調査期間	2007.04.09~2007.05.07		
第13次調査			
地番	今宿町336-1他	調査面積	1,276m <sup>2</sup>
北緯	33° 34' 28"	東経	130° 16' 14"
調査期間	2007.05.16~2007.07.06		
概要	本書で報告する4地点は大塚遺跡北部の台地先端付近に位置する。遺構・遺物の時期は平安時代後半と中世末が中心であり、それ以前の遺構・遺物が希薄な地区である。平安時代の掘立柱建物群は怡土莊成立期前後の農地開発に因連して營まれた散村型聚落の可能性があり、中世末の聚落では大内氏による筑前支配の時代を反映して防長系足綱がまとまって出土している。		

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1025集

**大塚遺跡 3**

—第8次・10次・12次・13次調査の報告—

2009年（平成21年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 久野印刷株式会社  
〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町3番1号  
TEL 092-262-5726 FAX 092-262-5720